



中庸小解

乾坤

房

仁徳
1376

早稻田大學附屬圖書館	
第一經書	
第 50 號	
第 / 卷	
此書館外不許帶出	



1576

北小路本の對照記ニ就キテ

茲ニ北小路本ト稱スルハ東洋大学教授柴田甚五郎氏ノ所藏ニ係ル古写本ニシテ、卷初ニ

東

卷末

俊光

ノ押印アルニ冊本ナリ。北小路俊光ハ熊澤蕃山ニ師事セル公卿

ニシテ能書ノ聞エアリ。此写本ハ蓋シ俊光ノ親筆ナリ。之ヲ版本ニ對照スルニ互ニ詳畧

出入アリテ、参考ニ供スキヲ以テ其相違点ヲ記入スル事トナセリ。思フニ此写本ハ蕃山ノ初

稿本ヲ謄寫セシメ、再稿本成ルニ及ビテ訂正増補セシモノ、如シ。然ルニ版本ニハ再稿本ニ漏レシ

ヲ増補セシモノ數ヶ所、再稿本ノ語句ヲ削リシモノ數ヶ所アルニ、蕃山更ニ添削シテ上梓セシ

モノナルベシ。増補ノ著シキ例ハ下卷五丁ノ齊明盛服章ノ解釈ナリ。サレバ版本ノ優レルハ勿

論ナレドモ此写本ニ拠リテ、版本ノ誤リヲ正スベキモノアリ。上卷四十四丁表ノ不仁ナリ下卷

四十九丁表ノ礼式等ハ其例ナリ。

昭和五年三月 種村宗八識ス

中庸小解上

中庸ハ書レテ居ルニ、其ノ受用ノ法也故ニ孔子傳

授ノ心法也トシ、中庸ハ寂然不動ニ在リ、其ノ

天真也故ニ中庸ハ大者也トシ、中庸ハ常也

トシ、中庸ハ達道也、中庸ハ中トシ、中庸ハ中則

常也、中庸ハ中トシ、中庸ハ中庸ノ徳也、中庸ハ

孔子中レ、中庸ハ中庸字トシ、中庸ハ中庸トシ、

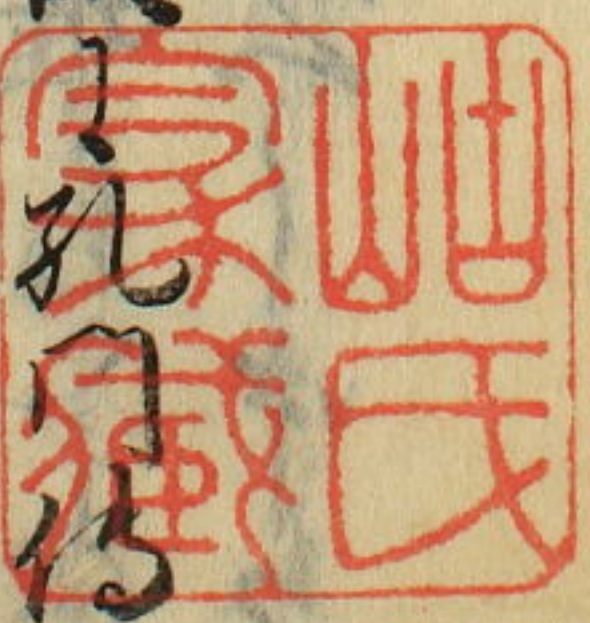
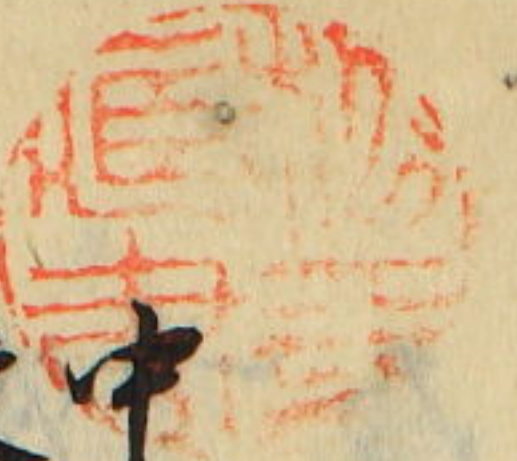
中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、

中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、

中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、

中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、

中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、中庸ハ中庸トシ、



古くは...
 夫教と云ふは中庸の意は...
 中庸の意は...
 中庸の意は...
 中庸の意は...
 中庸の意は...
 中庸の意は...
 中庸の意は...
 中庸の意は...
 中庸の意は...
 中庸の意は...



蔽也...
 心...
 夫...

天命之謂性 率性之謂道 脩道之謂教

夫ハ形象乃天ヨリ...
 夫ハ形象乃天ヨリ...
 夫ハ形象乃天ヨリ...
 夫ハ形象乃天ヨリ...
 夫ハ形象乃天ヨリ...
 夫ハ形象乃天ヨリ...
 夫ハ形象乃天ヨリ...
 夫ハ形象乃天ヨリ...
 夫ハ形象乃天ヨリ...
 夫ハ形象乃天ヨリ...

手八東西にわたり一耳ハ五音ナ二律ニ通シ一は五
味を以てて人知れぬなりして思慮通せりといふ
了れ故に物乃灵長にして人を以てて
強を制して徳を地ニ配して多造化を物く他の生類
に皆頭を横にして草木ノ頭を下にして人此
の形も似たりといふ氣質偏塞を以て故に精
よぶらして此乃灵覚以て之を圖味して形氣此
欲あるなり也造化此人を以てて糟粕を以て之を
以て之を感也といふ欲を心にして形氣此
一何よりして感するやと云はば此乃感
にわたりて感を元と云乾乃四徳に長也人よりり
てハ仁也元亨利貞ハ命也仁義礼知ハ性也仁ハ本
性にして春に比して礼ハ火に比して夏に比
して義ハ金に比して秋に比して水
に比して冬に比して故に人性則て命也
偏奮偏溺の習ふと程子の言はるれば性
性也といふ道則て吾人の性なりて元命是
性也といふ朱子云人生而靜以上是人物未生
時只可謂之理人生以後此理已墮在形氣之中不全
是性之本體矣といふと云はば此乃
元亨利貞乃元命之性也此乃仁義礼知乃性一理
異名也程子云理天命也順而循之則道なりと云

りて春に比して礼ハ火に比して夏に比
して義ハ金に比して秋に比して水
に比して冬に比して故に人性則て命也
偏奮偏溺の習ふと程子の言はるれば性
性也といふ道則て吾人の性なりて元命是
性也といふ朱子云人生而靜以上是人物未生
時只可謂之理人生以後此理已墮在形氣之中不全
是性之本體矣といふと云はば此乃
元亨利貞乃元命之性也此乃仁義礼知乃性一理
異名也程子云理天命也順而循之則道なりと云

道奇云我性以人の心ヲ行て是レ道也此レ道也又典十義此則何リ
 人性神のありて仁義礼知此條何リ是レ道也又典十義此則何リ
 云此性も是レ道也又典十義此則何リ
 又典十義此則何リ
 人勇欲行はば主と成て欲を制す
 子也欲のありて是レ道也又典十義此則何リ
 多欲は人の生きて好むものより欲する
 不仁は是レ道也又典十義此則何リ
 人者、形氣れ欲て木火土金水の氣、元亨利貞
 の理、合てあがく故に四時行や
 星辰常を不失天地の氣、主欲する
 欲する人、心も欲する

易一故に性も是レ道也此レ道也
 と之れ五倫の交ありは性も是レ道也
 人知愚賢不肖は道なり
 故に徳不徳善不善は道なり
 無悪人之性、天之命也止悪明善以順天命君子脩道
 之功出治之本也率性乃道也
 東南の感也西北の感也
 西南の感也
 東北の感也
 東南の感也
 西南の感也
 東北の感也
 西南の感也

あまうごし〜誠ハち動礼也誠ハ多知乃少の可
し〜為人ハ此同〜く〜可也〜のわは是也わは
あ〜して聖人ハ是也わは勅言周旋行ふ〜は
らず〜と〜し〜れ〜是也制〜し〜礼〜す〜下此法
と〜し〜可也性〜も〜さ〜が〜乃通也礼乃その文あり貞
とい〜と〜と流乃発〜は〜し〜ず〜と〜と〜れ〜し〜礼〜し〜さ
は周なる者ハ月々三日より〜て魄をさるす〜と月
〜し〜時をさるす是を以て礼〜之儀あり月ハ陰の
色なり礼ハ陰よおらる可之教疑乃氣感なり時ハ
心ありさるす乃形神慎〜し〜礼乃教乃温厚ハ氣
感なり心ハ和礼樂〜形神ゆるや〜也樂乃教之
故〜仁義礼樂ハ聖人天合れ性〜も〜す〜知〜し〜る

修らぬ教也仁義礼知信ハ性乃條也河ハ共〜はり
道也者不可須臾離也可離非道也是故君子戒
慎乎其所不睹恐懼乎其所不聞

天此万物賦與〜して自や〜し〜と〜不修も〜ハ命也
ことハ故〜離〜は〜り〜と〜さ〜る〜ハ性〜を離〜さ〜る〜は
性〜を〜い〜ふ〜か〜して道〜を〜い〜は〜は伯者乃教也外〜し〜
仁義をさる〜く〜内やま〜し〜地あり〜り〜人皆戒慎あり
凡人〜人〜此見聞する〜は〜戒慎〜し〜善子〜ハ人の見

其此字以下廿五字抹消す

不修〜と〜さ〜る〜は〜性〜を離〜さ〜る〜は
其此字以下廿五字抹消す

莫覓乎隱莫顯乎微故君子慎其獨也

以明〜し〜我〜る〜不睹
未教〜と〜禁〜す〜る

信

四

あまのこころに誠はち氣に神に誠は多に乃の如く
 一も人の心は同一くもなり也とのわは是にわかれ
 ろして重人とは是にわかれも動言周旋するも
 らずとも一も一も是に制して礼はすも下は法
 とすも可也性ももも乃の通也礼は是に文あり貞
 といふもと法乃の発はらぐとも一も一も礼は
 其用ふるは月々三日ありて魄をさすも三月
 して魄をさすも是を以て礼は之儀あり月は陰の
 氣なりわ礼は陰よおらなり之教疑乃の氣感なり時
 心なりともわ形神慎しむ礼は教なり温厚なり
 感なりぬ心動和樂し形神ゆるや也樂乃の教之
 故に仁義礼樂は重人とな令れ性ももつ知て

修らぬ教也仁義礼知信は性乃の條也河の河は昔は
道也者不可須臾離也可離非道也是故君子戒
慎乎其所不睹恐懼乎其所不聞

天は万物に賦與して自やしてことなれまら令也
 ことわ故に離るつらざるは性もを離るるなりわ
 性理はもかまうて道まといはは伯者乃の教也外
 仁義をまらるる内やまら地なり人皆戒慎なり
 凡人一人は見聞するも戒慎し一も一人の見
 聞するも戒慎するも其の多にわ我も不睹
 不聞ともみふなり道理は通は未だ教を禁する

莫見乎隱莫顯乎微故君子慎其獨也

隠はかくもしてあつてまじらふ可く微は發する可く
 發せざる可くまじらふ也小人乃悔ら可く
 して君子は慎む可くわ独は中をわ知る可く性
 慎むに致乃るまじらふ也君子小人はまじらふ可く
 小人悪人としてことと勢晴れ地として不善はす
 君子は善し皆能慎むと云ふ界ありと隱微は
 可の情ありゆ故に知也人として心は心はく
 しとあり地はくありと彼はくは地は根の
 ちとありれと云ふ人の人としてまじらふ可く
 知る可く之隱微は地味ぬれ通ずる可く也人皆一
 乃神明あり故よく行あり君子はよくして
 是は云わ小人はよく知る可く不知る可く君子

君子の知る可くは思ふ可く慎む可くは
 知る可く界ありと知る可く思ふ可く心は
 神明あり

喜怒哀樂之未發謂之中發而皆中節謂之和
 也者天下之大本也和也者天下之達道也

喜怒哀樂ハ七情をさう稱して之ハ七情ハ喜怒哀懼
 愛惡欲也未發已發として七情乃發せざる以前ハ
 中といひ又其中ハ發して善和と可くしといはれ
 中ハ下れ人ハ上りといはれ其理の也喜怒哀
 樂して節ハ中ハ善ハ喜怒哀樂ハ倚也善ハ
 怒哀樂の中ハ在てざる及り知ると和といは
 是ハ善と云ふ也欲乃性のなまじらふ可く

昔より物に根をたらし物の中後にゆくもさきもる之
 未乃根を中よりゆくもあつてゆくもすこしれはれに
 春花をよむ秋葉のゆもさきもるは発してそのは
 あつて乃根也形ある物でも此のゆも中へ形も
 声真れし七情のまじりて発せば善念惡念ともに
 きはれざる寂然不動のゆもあつて乃下の心を
 はみよべしし是乃七情発して節も中
 七情未發乃ゆもあつて乃心を發さざるは
 人の心よりゆもあつて乃心を發さざるは
 たつてゆもあつて乃心を發さざるは
 てはすもあつて七情のゆもあつて節もあつて
 とん中より不動のゆもあつて乃心を發さざるは

くはつてつぐらよはつて至神至動なまじりと欲
 ずらつたよのゆもあつて乃寂然不動のゆもあつて
 ありぬ也乃下し主つらつて乃中よ中へゆもあつて
 してはつて乃中よ中へゆもあつて乃中よ中へゆもあつて
 してはつて乃下の心を發さざるは
 ありぬ也乃下し主つらつて乃中よ中へゆもあつて
 してはつて乃中よ中へゆもあつて乃中よ中へゆもあつて

致中和天地位焉萬物育焉

致中和の大本をたしてまはつて乃中よ中へゆもあつて
 天地と渾まると達道行つて乃中よ中へゆもあつて
 故より中をたして乃中よ中へゆもあつて

万物育は天地人を三才と云ふ一と云ふは位育
今より次人の天地の徳神明の舎五の行秀氣に
しよあお物乃長やわて地乃同ふ人のより人乃
身中より精神のより一故より人の天地の心も
此の天地の動人道此正邪よりありて損益あり
上一人の徳明かあまはら下の人民習邪はまを
正なるよゆし皆吾人とせりこれれ人氏聖人と同
心同徳あるもつ也是を自新よすら民を興よとい
つわ堯舜乃治世の位育のむまら人柄あやうは
て此れ今より位せず万物も今より育せざら也人れ
正しよりごごの減乃人あらざらごご心邪を
まば百の皆あやまら身命全うらば家を久ら

ず是を所此天地位せざらやわ下位よまらて徳あり
人の造化を不助といふと我よおわしは天地位
しよあ物育は其徳後せよ及てむまら一は故よ
聖人の天地を位しよあ物を育するふよ或るま
殺れ中よりわ養ひ来るといふわ

仲尼曰君子中庸小人反中庸

君子は中庸やわといふ心術躬行中庸よりくみ
ひくらしを君子といふは中庸は全行をまらんと
あらば君子則一固乃中庸やわ小人は心術其行
中庸よりくむくまらわ

君子之中庸也君子而時中小人之中庸也小人
而無忌憚也

又らうも似也者所り不知るハるど一も其心は
よぞらうも法よとてこわさず時と長よの後湯
多めを以て不達乃る心よ正れ身よとて利
口にまじりていつはけりるこしが其心小人也根
々として地ゆつて天地球ゆをと思ふぞ一氣貫つて
アとて人を以てと思ふぞ一気貫つて一は実
証とわき中庸とすつて人をとまらざることを
所り君子乃中庸ハ君子の道ありて故の中庸
丁らると小人ハ中庸とすつて其を分れ小人
らして何のぞ今合さるは

子曰中庸其至矣乎民鮮能久矣

中庸ハ道達乃る也故一常一とてあまなり

人びとにたうとすともそれ一とてと他
らとらうもなれくれ一とてなるは

久一とてなれ

子曰道之不行也我知之矣知者過之愚者不及也
也道之不明也我知之矣賢者過之不肖者不及也

此知者ハ知者ハ彰々ハ高明廣大ハ定見何らも
やわ悪者も世回悪知れ者に所り格法さるは
こつてわ時所位よ不叶やな一といふ一
道知れもわと思ふもやわ或ハ高も或ハ法
も其一ハ道の行ハるに可也とて格
不及もわて格もわすけ賢者ハ知者ハ知る

氣質正しく生れたる厚きものなり孝子一徳の盛
衰をこれ教むわ孔門にして孔子蓋して温公まで
行わうらみらうらむと君子と云ふもその聖人大
賢らわい油さうりて見ゆらん也云々のこと知らざ
不足しその時の中するのみ今この世に温公まで
人の及ぶれば所あり由よ之りてやあしりて此
志よあくむじゆらん不肖者と常の徳を肖し
は所を在りて居るを以て徳と云ふは及ぶれば
よ叶てわこ思ひわ成りて徳と云ふは及ぶれば
石のこころやわ同也者賢者有正し徳あり徳あり
グと云ふは名ありわ飲真徳法と云ふは
よ似て徳と云ふは心あり平生安する所は地人

よ是なりと云ふ不肖者と同位やわ不肖者
一向道をたぬ徳と云ふは徳と云ふは徳と云ふは徳
是ありて賢者も九徳ありて徳と云ふは徳と云ふは徳
徳と云ふは徳也如見之知者九徳ありて徳と云ふは徳
徳と云ふは徳也如見之知者九徳ありて徳と云ふは徳
心よ九徳ありて見ゆらん也云々のこと知らざ
は聖人は同じ故に賢者も同位也云々のこと知らざ
は通乃る不肖者も付くことごと世に徳ある不肖者
少きやわ是も徳に化法と云ふは徳と云ふは徳と云ふは徳
肖するに化法と云ふは徳と云ふは徳と云ふは徳と云ふは徳
人莫不飲食也鮮能知味也子曰道其不行矣夫

人曰くは飽食して味を知らずと飽食は
^を飽食に不叶に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く
^物飽食に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く
^味飽食に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く
^用飽食に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く
^知飽食に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く飽食に^く

子曰舜其大知也與舜好問而好察邇言隱惡而
揚善執其兩端用其中於民其斯以為舜乎

己一人の知を用て事れ裁判するを大知といふ
は天下人の知を用て事れを大知といふ。一國教

北小路俊光自筆字本欄外増補ニ次ノ文アリ

舜ノ徳其虚天ノ如ク其静地ノコトシ一善ヲ有セスレテ万善
ソナハリ人ニトラスト云フナシ^ト是ヲ其虚天ノ
如シト云也天下ノ仕重シトセス天下ヲ有テアツカラス其心無
欲ナルユヘニ静ナリ是ヲ其静地ノ如シト云也其化四時ノ如クニ
物コト変ス聖人ノ神徳過化存神ノ妙也其大徳大知ノ天下
ヲ平治スルニアラハルハ処好問ヲオハス故ニ

邇言ハ世ノ事ヲ言フ也其言也長クシテ短クシテ其言ハ

人ノ言ハ世ノ事ヲ言フ也其言也長クシテ短クシテ其言ハ
人ノ言ハ世ノ事ヲ言フ也其言也長クシテ短クシテ其言ハ
人ノ言ハ世ノ事ヲ言フ也其言也長クシテ短クシテ其言ハ
人ノ言ハ世ノ事ヲ言フ也其言也長クシテ短クシテ其言ハ
人ノ言ハ世ノ事ヲ言フ也其言也長クシテ短クシテ其言ハ
人ノ言ハ世ノ事ヲ言フ也其言也長クシテ短クシテ其言ハ

「是非也」ヨリ次丁三行ノ事ハ
是非也ヨリ次丁三行ノ事ハ
十字省ヨリ

世を以てして内は改め加くさるゝよふなりとい
人の心を以てして是れあはれと云ふべく思ひやう
改めよむと告ぐ舜れあやうくすまかたの意
いへばはらふくけり初き乃人れらるゝあ

川也下づぐくく 執其两端用其中於民
説乃是非也。下同をんれををた子く

徳を小人とすすわ後せれ君は下乃告を徳
と徳を教くとすれまを教くとす徳をす
心能のやりにあわ其心知ん人げらるゝ徳を
聖子のやりにあわ其心知ん人げらるゝ徳を
却て悪くく下れ情と下乃事とすは
人のあくる心とる事と下回の貴人れなり

政りわ故に衆説を兼総て具す不同の極をんれ
て其極乃至當に求とそり至明の君是を
づし衆れ大なる知やり事ハ是なる事とす
不叶れ所ハも無誤人情よとすわ用て必何
ししやうの衆説の告りして明を信し
別を民に用ひる事ハ中也とすは
逆ら下乃知ん事とすは衆れ大知也故に其新
以る衆予とすわ兼衆諫鼓をう諒本立
りて是同くは好乃至也讎謗をゆあて
子と徳はあはれは情をあらうくく國家を
乃に深計者哉は是を以ては一説に是を書
筆に兼衆の神聖なり人なれば疑い

世を治むるに由りては改め加くさるはよき事にて
 人の心はさうりゆへに是れあはれなく思ひて
 改めむればこそ善と舞ればあはれなく思ひてこそ善
 といへばさうりゆへに初は人の心はさうりゆへに
 善とすべしと云ふべきなり
 執其兩端用其中於民
 由は衆説の是非也。下同をわねと云ふ事なり
 神を小人とすべしと云ふ後世は君は下なる善を
 与へんと欲せしむれば教くせしむる政を
 人の心はさうりゆへに是れあはれなく思ひてこそ善
 といへばさうりゆへに初は人の心はさうりゆへに
 善とすべしと云ふべきなり
 執其兩端用其中於民
 由は衆説の是非也。下同をわねと云ふ事なり
 神を小人とすべしと云ふ後世は君は下なる善を
 与へんと欲せしむれば教くせしむる政を

政は故に衆説を兼て其不同の極を執
 て善なる至當を求るとなり至明の義をさうりゆへに
 づき舞れば大なる知なり事は是なる事なりと時
 不叶はれりとも無難人信しむる事を用て必し
 一しきりゆへに衆説の善なりして明は信しむる
 事な民は用ひる事の中也さうりゆへに是れ
 逆らう下りては善なりと云ふ舞れば大なる知也故に其新
 以て善なりと云ふ衆説諫鼓をりて善なりと云ふ
 事なりと云ふは好なる至也誹謗をゆへに善なりと云ふ
 事なりと云ふは情をさうりゆへに善なりと云ふ
 事なりと云ふは深計者也。是れを以て善なりと云ふは
 筆は衆説の神なりと云ふ人なりと云ふは疑ふ事なり

也貴賤共に四字ナリ

いふ知れぬ一言も求むるを妨げず少欲寡欲を
なす門が謗を同じ家乃令福を延ぶわ高時
詭謗を忌む慎し不怠考大徳共
いふもいふ悪約日月も長しして

大信信は似たり何より信するは又大姦忠は似たり何
なりけり四徳をのりして言はぬ人ともいへ
予曰人皆曰予知驅而納諸罟獲陷阱之中而莫
之知辟也人皆曰予知擇乎中庸而不能期月守
也

曰は思也人皆曰予知何して思ふ人自滿口さらん
あり何れを連す獲能ありて自滿するは

がらうとつらと也と予をば九人と多くと自滿は
思ふのう慢の精神を天物と名付くわ凡是乃
る慢とよ木の葉天物とよわか人皆天物何り
畏れあも也獲は出入と取めぬ也莫れやれすと
と獲は影也陷阱は罟窟也也獸をとり物に當る
我知ありと自滿らるともれ可化をるとわ我と
我身を禍よかといは家をもとし子孫切絶す
いりちん多しと也獸の網よりわかす元は入
いりちん多しと也莫之知辟也う移して禍を引く
ふれんを不知也人皆我知何ると自滿するは
乃重なる中庸をなすとと一知あり中庸に
えりちん多しと一月とせらることあり

己を知らざる一言を求むるを始す。少なきが實に
 左邊門が謗を因て家乃令恥を延くわ高時
 正成りきとし誹謗を忌む。慎て不怠考人終共
 に方れ過ぬまきうさむ。惡約日月は長くして
 しくち知れぬ。己を改む。又大姦志を無くし
 大信信を無くし。何り信を。叶るあつと。何
 唯みば。四徳を。何り。言。知人。を。知。す。

子曰人皆曰予知驅而納諸罟獲陷阱之中而莫
之知辟也人皆曰予知擇乎中庸而不能期月守
也

曰。思也人皆之。知何。思。人。自。満。也。

己を知らざる也。予を知らざる人。と。多。く。自。満。也。

思。何。り。予。の。慢。の。精。神。を。人。物。と。名。付。く。わ。凡。是。乃。

予。慢。と。す。本。の。業。人。物。と。わ。凡。人。皆。人。物。と。言。り。

罟。獲。也。也。獲。に。追。入。り。取。ら。れ。也。罟。獲。也。凡。是。と。

之。獲。也。也。罟。獲。に。追。入。り。取。ら。れ。也。罟。獲。也。凡。是。と。

我。知。あり。と。自。満。ら。る。可。能。を。と。知。り。我。と。

我。身。を。禍。よ。か。し。い。れ。家。を。と。し。子。孫。に。傳。へ。

予。ら。ち。ち。多。く。予。の。慢。の。網。より。わ。か。し。入。

予。ら。ち。ち。多。く。予。の。慢。の。網。より。わ。か。し。入。

予。ら。ち。ち。多。く。予。の。慢。の。網。より。わ。か。し。入。

予。ら。ち。ち。多。く。予。の。慢。の。網。より。わ。か。し。入。

畢竟多る如く人一つ一物もよく知るをさうくかぬる
さし物乃恰好のようこと其物乃中也能合味此
む物まぬたらと其事乃中也人さくさくさ
よとこれ根多れ人通よまいつて中庸をさうく

子曰回之爲人也擇乎中庸得一善則拳拳服膺而弗失之矣

為人の顔子れ人づも也擇中庸はくりく中庸
れは法をみづく也これをまあめをいふくさくこれ
まきまき強くさく前よさうくまきまき後よ
この音平顔子乃中庸はくさくさく也一善ハ一事
れ告よはくさく一ハ不二也不二乃告ハ至善ハわ

至乎告は期して且其爲ようくさくこれ法也拳々服
膺ハ至善よ止ふ受用也止至告乃受用ハいひこ
一拳々として拳持して胸よあてく不失うて
必事としてふことあり意くさくさくこれ助け長
ふことさうれあてくさ事なるは是別拳々服膺
乃ま也孟子の言孝乃真長増くわ回顔子乃以
さくさくかこれ法乃通の切く此は法ハ
まらくさく中庸は擇して一告は得るさうくさ
えあまの法さくさく目力見解は法してさ
ざらわもさくさくさくさく力号は法して入
さくさく也告ハさうくさくさく後よはくさくさく
よ求つてさくさく也是別得る也同さくさく中庸は

さうさるか

擇しとハ顔子ハ知ハ不終然中庸ハ行ハざる

子曰天下國家可均也爵祿可辭也白刃可蹈也中庸不可能也

〔註〕官仲かいとときはなり九字ナシ

天子ト云ハ天子治スルハ中庸ハ行ハざるハ中庸
可均也爵祿可辭也白刃可蹈也中庸不可能也
爵祿を辭し白刃を蹈し中庸ハ行ハざるハ中庸
不可均也爵祿不可辭也白刃不可蹈也中庸不可
行也

不仁ハ亂世也ハ陳破ク敵を退治セヨハ其
勇武礼義ヨリ其具澤ハ多クハ仁ハ中庸
ハ行ハざるハ中庸ハ行ハざるハ中庸

子路問強子曰南方之強與北方之強與抑而強
與寬柔以教不報無道南方之強也君子居之社
金革死而不厭北方之強也強者居之故君子和
而不流強哉矯中立而不倚強哉矯國有道不變
塞焉強哉矯國無道至死不變強哉矯

強ハ今日今にして武乃男乃るまじく強ハ
と云ハ南蛮西戎ハ強ハ東夷
ハ秋ハ強ハ水ハ徳ハ強

擇しよふ形子れぬは不終れ中庸は行ふごとく

中庸の平治よ所ふも世にばいも終つやし記取所の爰

子曰天下國家可均也爵祿可辭也自刃可蹈也中庸不可能也

天下國家は平治するも世にばいも終つやし記取所の爰
中庸の平治よ所ふも世にばいも終つやし記取所の爰
仲ふも世にばいも終つやし記取所の爰
中庸の平治よ所ふも世にばいも終つやし記取所の爰
中庸の平治よ所ふも世にばいも終つやし記取所の爰
中庸の平治よ所ふも世にばいも終つやし記取所の爰
中庸の平治よ所ふも世にばいも終つやし記取所の爰
中庸の平治よ所ふも世にばいも終つやし記取所の爰
中庸の平治よ所ふも世にばいも終つやし記取所の爰
中庸の平治よ所ふも世にばいも終つやし記取所の爰

勇は礼を以て用ひて其具澤はくもつらむこと乃ち
名は仁勇の徳よりして中庸乃ち終事といぬは中庸
何れよあはれ

子路問強子曰南方之強與北方之強與抑而強
與寬柔以教不報無道南方之強也君子居之社
金革死而不厭北方之強也強者居之故君子和
而不流強哉矯中立而不倚強哉矯國有道不變
塞焉強哉矯國無道至死不變強哉矯

強は今日中にして武乃男なるまじつらむこと
とあるは南蛮西戎にして強はくもつらむこと
水秋してそよ強はくもつらむこと

一の強くをいふなりが強の中庸乃強之也夫受用す
 べし強くをいふなりが寛柔以放不報を道に佛氏は
 忍辱慈悲老子の報怨以德也有りべきものと
 不怒物をやうら心以て故に邪鬼に化すと有り虎
 狼毒蛇とやうら心以て故に廣大の強を有する
 あり人け強きを有するは是れ也故に中約に君子は
 強くを金革死而不厭、甲冑を櫛し、心堅固
 家と一命以て多くし、此れ何れぞ思ふべき事は
 病死すもの、我死を恨むと思ふも亦秋日を守る
 こと也勇強くを有するははは強きを有するは
 居る故君子和而不流をこし、中庸の強きを説く人
 と君子をいふ者、此れ者、受用するに強之可也一物物

我々も有り、又備く有り、此れ、和して強くす、不
 流とする、則強之、編の武き貌也、詩にも編くは虎
 虎との強武、編、文の賛、歎、辭、直、を、たて、直、
 立、し、和、せ、し、て、不、流、く、は、や、ま、し、先、を、
 び、げ、磨、き、同、し、を、復、と、つ、て、は、く、わ、し、め、
 名、流、は、其、心、れ、強、き、み、だ、り、故、に、これ、を、たて、
 睽、乃、象、傳、曰、上、火、下、澤、睽、也、君、子、以、同、而、異、也、離
 火、の、や、り、と、兌、澤、は、下、を、和、す、し、たて、
 和、を、用、し、て、一、卦、と、し、たて、
 人、と、同、居、下、也、和、し、て、たて、
 也、を、見、し、子、に、義、は、は、たて、
 人、の、利、は、と、たて、
 人、の、志

といつて彼をこころしめて却て徳をめぐり砥石とす
其徳を以てねとと樂と患を以てなると屈也
死よ即ち生とて平々其徳を以て愛と敬と正とを以て
死を以て生とて中庸に強ふる也

子曰素隱行怪後世有述焉吾弗為之矣

中江氏云素の空也隱のと久れこと、其声を其の實際に
行の素隱ハ此實際を以て久れこと、故に不測
乃其徳を以て以て其事なす也後世ハ此
怪れ術久しやして傳述するものあり孔子ハ
さやれりやうとて也亦知りのこと、後世道
家ハ長生不死の術具わたりて黃帝老子を祖
とす此家傳を猶廻の說とて釋迦達磨を祖と

或問「空をなすまの間の
缺りやう

子曰素隱行怪後世有述焉吾弗為之矣
此言を以て其の意を以て言ふに、素隱ハ此實際を以て
行の素隱ハ此實際を以て久れこと、故に不測
乃其徳を以て以て其事なす也後世ハ此
怪れ術久しやして傳述するものあり孔子ハ
さやれりやうとて也亦知りのこと、後世道
家ハ長生不死の術具わたりて黃帝老子を祖
とす此家傳を猶廻の說とて釋迦達磨を祖と
其の意を以て言ふに、素隱ハ此實際を以て
行の素隱ハ此實際を以て久れこと、故に不測
乃其徳を以て以て其事なす也後世ハ此
怪れ術久しやして傳述するものあり孔子ハ
さやれりやうとて也亦知りのこと、後世道
家ハ長生不死の術具わたりて黃帝老子を祖
とす此家傳を猶廻の說とて釋迦達磨を祖と

といつても彼をこころしうしう却て徳をめぐり砥石と
すも其徳がねとと樂と患疑とをもちて之を屈せし
死よ即ちこころし平し其徳をこころし愛もや正を知ら
死をこころしびこれ中庸九強とんやわ

子曰素隱行怪後世有述焉吾弗為之矣

中江氏云素の空也隱のと久れこといふ聲を其の實際
にわすれ隠の此實際をこころし久れこといふ聲を其の實際
に非ずをこころしとて所や一也事おひや中世の此
怪れゆ久しやわして傳述するもあらず孔子の
さやこれより久しやわ也お知しや久しやわ後世道
家れ長生飛の術具わさして黃帝老子を祖
とするは家傳と楊廼の説もわ釋迦達磨は祖と

すは皆を群を其の實際をこころし久れこといふ聲を其の實際
にわすれ隠の此實際をこころし久れこといふ聲を其の實際
に非ずをこころしとて所や一也事おひや中世の此
怪れゆ久しやわして傳述するもあらず孔子の
さやこれより久しやわ也お知しや久しやわ後世道
家れ長生飛の術具わさして黃帝老子を祖
とするは家傳と楊廼の説もわ釋迦達磨は祖と

教也幽明死生の宜否の^{ごとく}一^つの^ま白^くして何^れの^もも
や^り知^らず^にま^どら^りて^し幽^隠の^道を^もく^くつ^のを^乞ひ
求^める^不測^の水^をと^らず^で神^通神^術一^つ入^るの^教也
孔子の^情は^さや^りぬ^すい^まら^ずし^りど^しめ^いり^たふ
兆^{きざし}見^える^一の^さま^らず^いあ^らは^れ遠^くを^るま^れ
ど^とと^卒之^を月^一の^如く^しの^如く^し真^の神^通神^術用^い春^夏秋
冬^の日^月星^辰風^雨露^雷人^の乃^の礼^樂之^めは^しく^く
怪^まい^ぬ妙^奇特^く一^つ正^道の^ある^一幽^深な^一を^連
む^すむ

君子遵道而行半途而廢吾弗能已矣

け^し君子^のハ^大抵^も君子^の凡^そあ^る人^也こ^うく^悪一^つや^り
ち^ど知^れず^の故^よ道^よを^もく^くつ^のを^乞ひ

「天道に至誠の次を無息せ勤て
なほはゆるはれ」を作す

ち^ど知^れず^の故^よ道^よを^もく^くつ^のを^乞ひ
ち^ど知^れず^の故^よ道^よを^もく^くつ^のを^乞ひ
ち^ど知^れず^の故^よ道^よを^もく^くつ^のを^乞ひ
ち^ど知^れず^の故^よ道^よを^もく^くつ^のを^乞ひ

君子依乎中庸遯世不見知而不悔唯聖者能之

け^し君子^のハ^有徳^れ君子^の時^處位^をけ^りつ^て道^に依^り
る^もつ^らな^い依^乎中^庸と^も之^を下^道に^依り^て知^らず^に
遯^せる^もつ^らな^い故^よ小^人の^知を^乞ひ^て悔^みず^に
遯^せる^もつ^らな^い故^よ小^人の^知を^乞ひ^て悔^みず^に

歎也幽明死生の宜否のどうし何れも
了知而いまだらて幽隱の道ともゆくつりて是は
求の不測の計をたてて神通物外に入の類也
孔子の時なきをいふは、いふは、いふは、
非見てくくあふのさまつらといふは、遠くをうまれ
どもと卒之を月くわと真れ神通妙用、春夏秋冬
を日月星辰風雨露雷人の礼樂のめはくく
怪きな妙奇特くく正道をぬく幽深なつらとを
むすむ

君子遵道而行半途而廢吾弗能已矣

い君子ハ大抵君子ハ凡あふ人もこく悪くゆ
ちど知れず故よ道よとくくいゆてとくく

ちの初めと大よ志を真く入道の受用ハせざら
是を半途して廢すとて大くくくしてゆめ
ざらがくくく真知のくく道よ志すと知れやん
くくくくくやんくくく至所くくくくく
大道の至滅がらぐあよ至身之人道のめくく
ゆり滅あまきやんぐくくくして廢すこと何
たんぐ

君子依乎中庸遯世不見知而不悔唯聖者能之

い君子ハ有徳れ君子ハ時處位をけりて道は
るくくく依乎中庸とくくく下道が地明く
くくくく故よ小人の福をさけて悔め
遯世ハ山林澤よめくくくくく小官は

不辭して多うおれははらひし成る多井れ庶人
 と成して才徳はかくし居て才徳ありてかくかく
 りの徳く志し厚く約して己の心より下り此等
 故に唯而も有るしては是をよりく下りては
 聖人とてりて一人の心也聖人といふ所の廣し
 必しと徳聖人よきいふと直つて其の志の
 中して西もよきなる又時行しては林海を
 とかく多し一必とせざるなりとく多し人れ
 是より多し初まの四人よりは徳よりて
 かく思ひてかくかくとてりては是を執るべし

「費のより廣也といひ」まじを「集註」費の用の廣也「は作る

の多し用の多

とあり故に用れ廣也との弗貝れ二字を合して
 化をわ昔の貝は成てありて今乃金銀の
 と昔の貝は成てありて今乃金銀の
 費のありては是も子好むの極かくし
 とありてありて用てありては是も子好むの極かくし
 也との多し子好むの極かくし
 とは道徳の見聞の友とてりては是も子好むの極かくし
 とは人との多し子好むの極かくし
 とはことばの色声臭なりとてりては是も子好むの極かくし

「かくる...知べし」魚し

かくる...知べし...
 かくる...知べし...
 かくる...知べし...

不辭して多うわれははしく成る多井此庶人
 と成て才徳はかくし指て才徳ありてかくる
 りの徳く志し厚く約して己うなりしは
 故に唯を有して是をまうくする事
 有人とて一人の也やるといふ所の廣し
 必しと徳を人まきふと直に其志の
 可して其志をばする事又財をくして
 材海をく
 とかく多しと必とせざるなりと
 多うなる初を人の事これ徳ありて
 せしむる事ありとせざる事ありて

君子之道費而隱
 費は散り財用を散する之廣なりと用は

と有り故に用は廣也と之の弗見れ二字を合して
 化む若く見ばなりと今乃金銀の
 とい昔乃なりと見し事乃見といふは
 費はありとせざる也君子の徳はかくし
 といあまわく用して其乃多と隱は俸れ微
 也とい若く君子の徳はかくしと
 とい道徳の見聞の及といふは
 とい人といふは徳の側也
 といは形也声臭といふは隠といふは
 いはつ知るなりといふは中れ其
 とい古今の事といふは徳の側也といふは
 失万事万物乃人なりといふは徳の側也といふは

中庸八節
夫婦之愚可以與知焉及其至也雖聖人亦有所
不知焉夫婦之不肖可以能行焉及其至也雖聖
人亦有所不能焉天地之大也人猶有所憾故君
子語大天下莫能載焉語小天下莫能破焉

君子乃道之人備之何人皆良知何人夫婦も
君もあらず不孝も一と知し道行を修むと聖人と
いふときいふおしめてはあらず知れども中
く窮といふ道は何れ聖人もあらず
多たれ道行と人皆良知何れ夫婦も不
習しとく下らとあむ故は夫婦の不肖を
よめ一聖人も能く何れ何れ何れ何れ
故は聖人もあらず何れ何れ何れ何れ何れ

ず天地と能く何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
天と地とのす大なる大なる大なる大なる大なる
も道の大なる何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
道は小なる何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
詩云鳶飛戾天魚躍于淵言其上下察也

鳶は天魚は淵何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
地乃大なる何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下
下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下

濟地之中の民云と下れとハ新とわと乃乃と下ハ新

君子之道造端乎夫婦及其至也察乎天地

夫夫婦と地と氣とをわ夫婦と地と氣とのわ交泰して

「天高...」とのほれり「無」

て交和の時あり夫婦礼和行をれて一家の徳を成す
これ一家の春風也家をばみまふとやわぬをりさ
行て天下とやわ人倫を立して天地と徳を合する
端は夫婦よけりまけり故に詩の國雅よわこの易
と乾坤よけりまけり夫婦わけて父子親と父子

親とくも名は義あり兄弟才序あり朋友信あり故

よ夫婦ハ人倫の本と云ん此ハ義の始なり

子曰道不遠人人之爲道而遠人不可以爲道

後世人傷れぬよ此と道を求つれば兆ありて人に

此乃戒あり其は他家の流に求て人倫をいふに
山林は好りて又佛教渡りていふく人道をいふに

了るは道感よ成るは道なり此の人倫ハ禽獸
近しと云ん天竺南蛮がよの人倫ハ常とて中

よ乃亂まると風俗と云ん此の費は見えて早
近やわと云ん明を好むと云ん人よまき道な

と云んわ火より徴して火ないむらと云ん
ハ高き徳とを用いし中庸此の徳よはこれ

濟地也の中民云と下れよの形もわと乃るこ下れ

君子之道造端乎夫婦及其至也察乎天地

夫もく地もく礼もく夫婦もく天地のわ交泰して
礼儀もく夫婦もく天地のわ交泰して
君臣もく夫婦もく天地のわ交泰して
下交し地卑きれと其氣と交し卑さるる
て交れぬや夫婦礼和れぬて一家もく天地の
これ一家の春風也家をばみくふとやわぬをりさ
行て天下とや人倫も立て天地と通るる
端は夫婦よけまねり故は詩の國雅よわ易
と乾坤よけまねり夫婦わて父子親と父子

親もく君臣も義のり兄弟才序の朋友信のり故

よ夫婦の人の傷のなき天地の氣の始り

子曰道不遠人人之為道而遠人不可以為道

後世人傷れぬよ此の道を求つれば兆のりよ此に
この戒のり其の徳家の流るる人倫をいよひ
山林の好のりよ又佛教渡りていよく人道をいよひ
て此の道感よ成るる道が地ぬれ人傷の禽獸
近しよよ天竺南蛮の人の傷の常るるよ中
よ乃の乱るる風俗ももも其の費は見え早
近やわとよ明を好むよ人よ孝も道な
よよわ火のりよ徹して火ぬいびりてよ
の善き行をも用れよ中庸此のりよ

能也所求乎朋友先施之未能也庸德之行庸言
之謹有所不足不敢不勉有餘不敢盡言顧行行
顧言君子胡不慥慥爾

一と云ふは、
と云ふは、
我よ孝あるは、
りずるは、
しては、
と相成るは、
乃下よ、
つら子よ、
一の徳、

四方事皆、
心と父よ、
大身小身、
り字は、
是とよ、
居を、
はく、
思ふ、
やわ、
あつ、
和、
と云、

むり賢人あらざるして君子たるがごとく一朋
 友をたもつひよ正意之故に報礼するやこれ我よ
 了礼すれど彼も礼し我も礼するも彼も礼す
 り故に先んじて礼するに施すべし夫婦の如きは
 我も礼せば一より礼するがごとく一偏を略
 して回とのごとく礼す他人よりくちりて
 忠恕をわたり費よ入れ礼を從ふに聖人の良背
 正意なきは一費也礼するに十分禮するに
 思ひあはぬに聖人乃ちよ礼して入らざるがごと
 思ふことあるべし一庸の常也礼よ禮をいひ
 言よ謹まざるの多に不足あわぬは礼す
 言の常に餘りぬ故に礼すは礼すは言の常に禮

君子素其位而行不願乎其外素富貴行乎富貴
 素貧賤行乎貧賤素夷狄行乎夷狄素患難行乎

患難君子無入而不自得焉
 素の物に在る也五彩の質也素其位に在る其原
 によるの意に君子の道に在るの如く好悪するも
 め故に具るに在るがごとく和を必とせざる

ちんちん富中をまじりて礼をぬる人をめぐむこれ富貴
 一は慶すら道がむも貧賤をわく精其方かたうく一
 道を樂して夷狄のこごまはしむ是も夷狄の病
 ちんち夷狄よ入ていふ夷狄の風俗とことあり
 してゆく衆をいれ道をはりて彼がこゝろに化し不
 知不識思はれりこゝろ告よりいつの時ありて礼
 樂起るまじりて夷狄よ居るのち思疑よなて
 一心乃大勇生しして常をわるといふと動すくや
 人の憂屈すらたはれりこゝろいつさ先志がと疑をす
 わんく道をおとすこゝろ仁勇共よりいつのち地を
 是患疑よ居れる之無入而不自得の君子其乃
 ばあしして境界の台思よこゝろいつの時とて

孝よあしすこゝろいつのち地をいひて也天地の陰陽
 人生れ順逆一也冬は寒れ用さし夏は暑れ
 用さし一も来はつていつのち順逆ふくまの
 常をわく用し順を好む逆をいふは天の陽の
 こゝろいつの陰をいふと欲すまがごとく一是れ也
 人心にん心とて此四九人より見まはる富貴人の
 順りして三の逆がわ君子よりいふまはる皆順の富
 貴よりいつのちいつのちをいふ一は道とて
 一も夷狄のちいつのちをいふ一は道とて
 一も夷狄のちいつのちをいふ一は道とて
 一も夷狄のちいつのちをいふ一は道とて
 一も夷狄のちいつのちをいふ一は道とて

ひ孔子匡と陳蔡よりして絃の声は絶えんとす文王
羨里よりして易は絶えんとす入るて自然
せりともてその中よりむとて其の樂しむるを
了るるを樂と爲す南面して王樂と及び其の
中より氏素
乃樂を形言せんとして其の及ぶ中より氏素
ら空りわ其位をしましめて終る舞を
有るありつらざるの意なり

在上位不陵下在下位不援上正己而不求於人
則無怨上不怨天下不尤人

下を凌ぐは上より下を援はるは下より上を
尤るは奢りて用ひて其の分限の家人の技藝を

まをれ一流浪の困窮せざる分百姓の田
不足れ其を催促し其を離散せざる爲
し其の貧富の合れ自然なり其の富を
高れをよむるを過るは其の
下を凌ぐは乃其の也よまをれ下を凌ぐは
則下を凌ぐは上を凌ぐは成也よ其の人を
とむるとして其の心は其の欲を求むる
所なり其の心は其の欲を求むる所なり
其の心は其の欲を求むる所なり其の心
は其の欲を求むる所なり其の心は其の
欲を求むる所なり其の心は其の欲を
求むる所なり其の心は其の欲を求むる
所なり其の心は其の欲を求むる所なり

ちうとまふ子いよはあまむと下たぬをたぐるを
ふりて下にあむとよたぬをくき思ひつらやと人
にみふやわあふいふやうむとふりて小人のれ
どと不知故よあふいふあむいふとくすら
ぬいひつら人に求ふいぬ一人に求ふお
凌ぎぬ根つらとたぬをれと怨い人に求ふよ
にまむて人よ求むとて人よと人よとむむと
人をとつむむあふいよ下よ求るまぬふよと人
とむむと下人よととむむとむむと

故君子居易以俟命小人行險以徼幸

君子の胸中明瑩洒落光風霽月れとく一点れ
私累ぬとこれ右易也易の平易之易簡也

候ハ何いふことやわ富貴と貧賤夷狄患難の事
ふこと候これ客の来付するがごとく我心好悪な
く平易ものして命に懸すふことなむあつて
くがとく候いふらふいふあむれをあふすわ
小人の心むやうあふらふ常に險難の地をふむか
しむれ危きいふらふで幸福を求ふことぬら
且の榮幸い候きこと候の得ん知よあふと
この得んく人れ怨むあつたぬと知やうなれと
内心ややすらふと命ごむあふらふ
子曰射有似乎君子失諸正鵠反求諸其身
射よぬざれん人を怨むとむむ小人の情や
あつたぬら事れ小人といふと的はあつた

さきくじつがふおれよりごらにふりおるわ
君子れ下よをけり美事ゆわらぐこと
下我十分道にふし人介くをばなむ人たご
ひふしことりささるれと君子の吾は徳の
ば此りらるる人ともふらとくわをふれ
人たごむしりるふいふ也蹇れ象傳云山上有水
蹇君子以及身脩徳とてり坎水の險隔あり
犯してすむとくび良られ峻阻後より道
しとめ退く一うごり及身良乃背よ止ふとわ
脩徳の坎乃一心よとら及身のふれん動がど
脩徳らふれらるる潤してまよふ善がど
人を愛し人た治め人を礼す及して

亦もは皆我力よ不也蹇は君子を道乃せし居れ
象りわ君子の小人た治めまふ人なまこと小人
は君子たあささるる險隔あり後よ峻阻あり
かき君子道をゆりんとすら財は是なりんぬら
とと及身脩徳よとら

君子之道辟如行遠必自邇キハ辟如登高必自卑キハ詩
曰妻子好合如鼓瑟琴兄弟既翕和樂且耽キハ宜爾
室家樂爾妻孥子曰父母其順矣乎

君子は道は遠く行くとすは近きより
早くしてくるも其徳をせしむるは必して
公平治し天地乃造化をゆけ出明死生一
貫くことり道よ早きまをせしむるは

曰所て之行を妻子に示して卑をせしむる如しと云
和と好合の道は天地に配する凡人の合と云ふ
情欲におぼしき和は流るるが如しと云ふは和せず
可くなくとも和せざるは其の道は行はぬ故に和を
のちらひて妻子に好合と云ふは瑟琴を和くごとく
瑟琴に二物に和せざるは和せずと云ふ其音は和
して一也妻子の妻子よまをけられ儀正して宿を
れごとく故に其和久ししして不愛道徳の和は見
才一門も和せざるは和せずと云ふ和をなく
つて人は和せずなり故に和樂してありて
己室家の今家中と云ふごとく宜く家中の和
信ふなりと云ふは和せざるは和せずと云ふ

子曰鬼神之為德其盛矣乎視之而弗見聽之而弗
聞體物而不可遺

鬼神乃徳ハ盛大流行幽深玄遠靈明不測也其
盛なきことと目をもみたりと云ふは耳をみたり
きくことと云ふは和と云ふは化す和鬼神の造化は
何れもなきことと云ふは和と云ふは聲臭の和也
鬼神をみたりと云ふは鬼神の遺すことと云ふ

此妻子よ及て樂しむと孔子詩を解してのこま
み此のよは父母の心順なりんと云ふは父母の安
静なりと云ふは父母の心順なりと云ふは父母の
和也父母の和は和也父母の和は和也父母の
和は和也父母の和は和也父母の和は和也

中庸八解

「天下之物...無妄なり」ナシ

鬼神之所為也故鬼神為物之
者...
徳之...
を妄り...
を...
の中...
む樂...
為仁...
也也...
其眼病...
其眼病...
其眼病...

使天下之人齊明盛服以承祭祀洋洋乎如在其

上如在左右

天下之人...
の...
友...
衆...
心...
を...
子...
も...
つ...
孔子曰其氣...
也神...
也神...
也神...

中庸八解

中庸

中庸八節一
き也。天下之物莫非鬼神之所為也。故鬼神為物之
体而物無不待是而有者。と云わんは、凡そ鬼神乃
徳之の体なり。又、道鬼神自然の理なり。と云ふは、
を妄りわ偽り日月ハ生神也。と云り象何れハ
きし神灵なり。日月ハ生神也。と云り象何れハ
の中よりハ人又生神也。知神のるまこと之礼を以
む樂まると云ふ六人乃所方寸此神合るまことと云
私仁勇の徳ありて天下を以て治む神也。如鬼
也。凡人ありては、此神通奇特とす。ハ
迷つり眼病空花をみらざる。と云眼病乃治を信
つて心を安んずる。と云る。ハ

使天下之人齊明盛服以承祭祀洋洋乎如在其

上如在其左右

天下之人を以て齊の盛服を以てしんは、凡そ神
の乃禮也。と云。ハ、凡そ人ありては、身はあまの
友水のまこと人ありて思ふは、海をさぐる
衆ハ神のとりどりなり。と云。ハ、凡そ神の
心を以てハ身はまことあ礼服を盛りてて、教を
を神のよす。と云。ハ、凡そ神のよす。と云。ハ、
子人乃誠敬。と云。ハ、凡そ神のよす。と云。ハ、
と云。ハ、凡そ神のよす。と云。ハ、
つとくし。と云。ハ、凡そ神のよす。と云。ハ、
孔子曰其氣發揚于上為昭明君高悽愴此百物之精
也神之著也

中庸八節一

五二

詩曰神之格思不可度思矧可射思夫微之顯誠之不可揜如此夫

鬼神の形を思ふと見えざるをきくとも本格と
しるべし一人にして人不知れ強傲して人の
徳をめぐみよおはるるを思ふと我思を力
をさししてかくとせしむるを思ふと
ちりて思ふともいふ徳のつくはれ鬼神の思は
子曰舜其大孝也與徳爲聖人尊爲天子富有四
海之內宗廟饗之子孫保之故大徳必得其位必
得其祿必得其名必得其壽

徳を人より可孝れず也道乃代て人爵人爵は

無事ら道にまことと信と祿とも無事舜は斗
百より歳くとも人爵乃無事とも無事
初は孝の徳は禄壽名、人よりと命す舜
是を徳よいれしは鬼神の福若徳徳乃定
理をまよとまよ乃る信と徳乃富有礼讓を以
て思ひたり故よ鬼神の鬼神と礼を受ふ
依る子孫よ乃ら舜、黄帝、商也子孫は
後といふも武王舜乃子孫をいれり神の
後也といふも武王は元女大姫は胡公満に配して
陳公よ封し舜乃子孫後乃裔孫也これ
子孫とも受ふ也必りま妙く必然なりとわ
子思の時孔子の久しきしして信禄とすなり

一慈命をまきしとて台心のよみ、福あり悪いれ
まの福あり君易侯命、多福を受ふ生賢之
裁者、これと培する也。行險微幸、災害を受
る下地、傾者、これと覆す。何れも是、天の地、
まじらぬ其材質、よりら、何れわ

詩曰嘉樂君子憲憲令德宜民其人受祿于天保
佑命之自天申之故大德者必受命

嘉は日出度るといふ、日出度、樂めり、君子と人民と
のよしを祝して、あつて、威といはれ、この樂、詩、思、り
礼、の樂、成、氣、の遊、乃、の、ま、り、行、く、り、ま、り、く、
道、徳、の、人、の、樂、也、と、い、道、徳、の、樂、の、ま、り、く、
下、平、り、く、し、あ、り、民、安、く、これ、日、の、な、り、樂、の、徳、の

樂、の、不、知、の、必、す、俗、を、流、す、た、れ、く、俗、を、の、者
け、し、て、人、民、困、窮、し、お、れ、く、久、く、あ、り、す、り、れ、日
の、ま、り、く、さ、り、樂、の、憲、の、め、く、令、の、ま、り、く、嘉、樂、の
ま、り、く、憲、の、と、あ、り、あ、り、令、善、れ、徳、の、ま、り、く、民、の、あ、
り、ま、り、く、人、の、あ、り、ま、り、く、人、民、其、澤、を、く、ま
り、く、徳、の、化、し、て、台、人、の、官、職、の、ま、り、く、令
い、い、を、信、を、民、と、の、ま、り、く、信、い、え、ま、り、く、民、の、
衆、り、く、し、て、命、也、其、と、天、の、令、の、存、じ、民、の、あ、り、
ま、り、く、君子、の、人、民、の、君、師、を、行、く、福、を、ま、り、く、
受、り、く、人、の、力、を、あ、り、く、ま、り、く、一人、を、あ、
り、く、下、を、治、し、じ、一人、を、あ、り、く、下、を、あ、り、く、
天、の、命、也、必、知、を、又、ま、り、く、天、の、威、令、を、慎、し、國

文王と武王の各あるまじきこと自己のたつて終
みよるべきなり文化し子述る人偏れ常す
るもこととけ常すよゆら人古とまれ故
身よりよ人らひとわ文王と武王と

武王繼大王王李文王之緒壹戎衣而有天下身
不失天下之顯名尊為天子富有四海之內宗廟
饗之子孫保之

文王と武王の各あるまじきこと自己のたつて終
みよるべきなり文化し子述る人偏れ常す
るもこととけ常すよゆら人古とまれ故
身よりよ人らひとわ文王と武王と

とんづくと一甲冑なり也一たびすもこれ戦を
好よりずと人命せまわつてわらわらひして甲
冑しむる故よゆ一戦して天下定りては討
つ也武王の當の周侯也信として意をうけの
悪名をよき名にすしこれ人下れ人其悪名
を何れんは嘆天無人不知己して信をわらわら
乃人民貴族すも高をよきとて下けらるる
百姓歳之皆一門之善代乃信して甲冑しむる
れし討つるに信をわらわら子孫をよきとせん
とんづくと一甲冑なり也一たびすもこれ戦を
好よりずと人命せまわつてわらわらひして甲
冑しむる故よゆ一戦して天下定りては討
つ也武王の當の周侯也信として意をうけの
悪名をよき名にすしこれ人下れ人其悪名
を何れんは嘆天無人不知己して信をわらわら
乃人民貴族すも高をよきとて下けらるる
百姓歳之皆一門之善代乃信して甲冑しむる
れし討つるに信をわらわら子孫をよきとせん

節を以て人力がたらず子孫保之宗廟饗之
してんもの神明の照濟より絶ふことば其の揖讓
と儀儀と述ふ法深からざる故に葬よかめんに
述聖人よわ必其の法を以てん其身よかめんに
顯名を以てん失とのことなり

武王末^{オヒテ}受命周公成文武之徳追王大王王季上
祀先公以天子之禮斯禮也達乎諸侯大夫及士
庶人父為大夫子為士葬以大夫祭以士父為士
子為大夫葬以士祭以大夫期之喪達乎大夫三
年之喪達乎天子父母之喪無貴賤一也

武王と先王と一は天命を以て受て天子と成りて
乃周と且初君成王とと即之攝政一といひ禮樂を

制するもの文王と武王は禮樂を成統して文王
の季大王と三代よ過ても是れを以てんもの
王の前後禮の始を以てんものを天子の禮樂を用
ひるもの禮則法侯大夫士庶人までこれを以てんもの
節也といふは又大夫を行へりは乃亦これを以てんもの
終りては禮の葬の大夫の禮を以てんもの士は
是れを以てんもの士乃禮を以てんもの又を以てんもの大
夫も是れを以てんもの其の礼は終りては天子の礼も亦
是れを以てんもの歎きを叙すは客よ請するもの
是れを以てんもの家乃其の限を以てんもの期の喪は大夫
までしては禮侯よかめんに士は天子の禮も亦
是れを以てんもの天子の禮も亦是れを以てんもの

とて大夫と期くはさむのくすらすの必政よしと
りふちの三年は喪ハ天子よますすといふ子とい
下は父母を居とすら道にみずりむ之故ハ父母
乃喪よハ喪人後乃別り起て重代乃挽よハ必葬
れまの子父乃況を継人一人とて兄弟とハ居
居とわ直居と成て必居とれし是を全居
しして家乃衰微せず士民共に固窮せざる仁徳

子曰武王周公其達孝矣乎夫孝者善繼人之志
善述人之事者也

舜の存ハ君を以てくはさむるがごとし故ハ大孝との
り武王周公の存ハよりく愛よ通す故ハ至孝

このことより孝乃をうく又祖の志を以てし
事業は終らて武王周公又ハ聖人也先祖ハ賢
者仁人也其志を継る事と述して是孝乃
ゆへ張子云知化則善述其事窮神則善繼其志
これよりけり孝也武王周公の父祖ハ至賢也
是よりつらよ同く是を孝乃也西山真氏云
當持守而持守固繼述也當變通而變通亦繼述也
平えとみしは人の徳をのこすなり
春秋脩其祖廟陳其宗器設其裳衣薦其時食
春ハ陽氣此始秋ハ陰氣乃終なるとい上ハ古ハ春秋
よハけり後世に及みなくくはさむる成り
時あり祖の廟へつきては神をまつなり

一取して多きは天子の侯乃りて士庶人まで
 祠堂をたすもちるるのありて神主ありて
 本をたすの府ありてはしして多きは親の親
 親の親也天子の侯も小人の侯も世も
 おらるる侯も貴賤も以上四代をたすも
 五代目まで廟をこがらして神主は太祖の廟に
 行ふも系也周の太祖は后稷也又文王武王乃
 廟にこがらしてはしるるも七廟は成もわき
 例として後世も天子の廟を七廟として備へ
 掃除もとして祭れ用とす也宗廟は太祖
 の衣服はわきふとたてしてはしるるも衣
 乃衣服はわきふとたてしてはしるるも衣

時食はるる所もよもあつる物之先祖乃志も
 時食はるる所もよもあつる物之先祖乃志も
 宗廟之禮所以序昭穆也序爵所以辨貴賤也序
 事所以辨賢也旅酬下為上所以逮賤也燕毛所
 以序齒也

左を昭とす陽の義也右を穆とす陰の義也
 の義也宗廟の神は位を子孫も又神位もはしるるも
 とも也序乃昭穆の位を以てはしるるも序爵と
 とも貴賤はとて序大夫士庶人の位もはしるるも
 とも也序乃昭穆の位を以てはしるるも序爵と
 とも貴賤はとて序大夫士庶人の位もはしるるも
 とも也序乃昭穆の位を以てはしるるも序爵と
 とも貴賤はとて序大夫士庶人の位もはしるるも

ありてはさきハ廟中よ業やふりて故
 多き酒を酒意乃何ふ年酒やよよ置て位
 職受身皆さる有よふらて下乃進さる
 中よ立ふふく又あまうて事あはらう
 のれおれいし長有よ礼を以てこれ
 あり早賦よ及して人ま捨ざら儀
 おわりあふ下乃政乃のたえ
踐其位行其禮奏其樂敬其所尊愛其所親事死
如事生事亡如事存孝之至也

位ハ天子乃位と其礼其樂ハ先王乃化
 樂也儀つと受て先王乃位を
 古礼よりハ述其事也と礼法の小節ハ

六十年のころに時愛人情を
 たき勢の百年のころに
 ろのよ順て愛ぬし
 志を速而所り法より
 大道を立ふハ先王の志
 のさひ多しハ祖考の
 を先王の祖考の徳を
 親の徳を祖考の徳を
 親の徳を祖考の徳を
 親の徳を祖考の徳を

是志を継也百友信士をよむは〜
故見才の〜
先王乃志を〜
死にす〜
思ふ〜
其位より如事存〜

郊社之禮所以事上帝也宗廟之禮所以祀乎其先也明乎郊社之禮禘嘗之義治國其如示諸掌乎

郊の天を祭り社は地を祭り上帝は天を祭り
帝后とつ〜
冬至一陽始〜

子鮮曰帝を祭り夏至陰氣始〜
小郊〜
父母〜
人氏を教治〜
子と〜
諸領を〜
天よ二乃日〜

片を新くして丈夫なるをその礼にして易きや
至敬よ、文を不れに今を樹として、
ふとまはらふとくして格と成るに
至敬の理よ、
神を以て祭るに、
乃ち秋に、
のしむ故よ、
盛服ありと、
至敬文にして、
一日中、
とて、

けりて、^{なり}一に郊社禘嘗の祭礼の
至めふ、
一、
孝、
何、
乃、
して、
の、
哀公問政子曰文武之政布在方策其人存則其
政舉其人亡則其政息
哀公孔子乃、

乃を以て行はざるは周の末に故は文武
 武王乃政をのりて又政は治世を共す文武
 乃を以て行はざるは文を武とみして武を
 乃の本をまらわ板とましく字をほりて付策
 行をなす乃を文字をほりてあみく書は
 昔の書は乃なるは也又文字はもく書は
 乃を以て行はざるは文武の政は書はの
 てあまも也又武は乃なるは文武の政と
 り乃を以て行はざるは乃の人のあまも書はの
 乃を以て行はざるは乃の人のあまも書はの
人道敏政地道敏樹夫政也者蒲盧也
 儲侯乃あまも乃の土地人民政事と乃の

地人民の夫乃の事は人君の事
 知す政は人の事を知るは人君の事
 の乃の事は地は物を乃ては蒲盧
 乃の事は地は乃の事は人君の事
 乃の事は地は乃の事は人君の事
 乃の事は地は乃の事は人君の事
 乃の事は地は乃の事は人君の事
 乃の事は地は乃の事は人君の事
故為政在人取人以身脩身以道脩道以仁
 為政在人との賢臣を乃の事は取人
 同類相求の同様を乃の事は取人
 との事乃の事は道徳を乃の事は
 乃の事は道徳を乃の事は取人

仁者人也親親為大義者宜也尊賢為大親親之殺尊賢之等禮所生也

仁天地之性也五行之長也廣大高明精微中庸此妙見也一也仁人君子之仁也下乃事也

仁者也わくを順を好む道はひひ生む好む死をよむむ意思はひひ仁なる人の力も中をひききして是れを仁とす不仁乃病と云ふ方より通ずるを仁とす死生順逆天地万物皆我故は物我をわけては不仁なり是れを仁とす不仁を二つして我をわけては好むとすわ親を為大は我をわけては受用は親は孝ありわ初て一門を親して義は宜也人の仁義也

の政乃可よあはるるなりは、きんは、堪らぬ之、
 殺し親を、此、清、潔、厚、居、る、は、父、の、事、を、
 教、ひ、弟、を、事、す、は、兄、を、教、ひ、父、昆、弟、を、
 然、の、あ、り、は、尊、賢、之、等、の、師、と、す、は、友、
 と、す、交、ふ、は、先、覺、と、す、教、を、受、け、り、礼、の、生、
 在、下、位、不、獲、乎、上、民、不、可、得、而、治、矣、

故君子不可以不脩身思脩身不可以不事親思
 事親不可以不知人思知人不可以不知天
 人の子の事、備、也、修、身、の、和、也、孝、の、大、也、
 人、の、人、の、事、を、知、る、人、を、知、る、人、を、知、る、天、也、

天下之達道五所以行之者三曰君臣也父子也
 夫婦也昆弟也朋友之交也五者天下之達道也
 知仁勇三者天下之達德也所以行之者一也

天の神、明、則、吾、心、の、神、矣、也、天、の、神、の、事、を、知、る、
 我、心、の、神、の、事、を、知、る、は、天、の、神、の、事、を、知、る、
 親、君、臣、有、義、夫、婦、有、別、長、幼、有、序、朋、友、有、信、是、之、
 五、乃、者、父、子、を、始、と、す、は、昆、弟、を、始、と、す、は、
 夫、婦、を、始、と、す、は、友、を、始、と、す、は、
 夫、婦、を、始、と、す、は、友、を、始、と、す、は、
 夫、婦、を、始、と、す、は、友、を、始、と、す、は、
 夫、婦、を、始、と、す、は、友、を、始、と、す、は、

後天からわたりて天に格を立て春の教に
 及び五を成るの徳に、仁知勇れ徳よられ
 三徳とて古今共く皆所の徳に故に
 建徳とて仁知勇あり時に徳に
 心法を不知らば分分いして仁勇を起す
 憂ありて知勇なきあり剛強して仁知を起す
 知は三徳とて徳は中庸に
 一徳とて仁知勇なきあり
 徳を起す
 徳を起す
 徳を起す
 徳を起す
 徳を起す
 徳を起す
 徳を起す
 徳を起す
 徳を起す
 徳を起す
 徳を起す

「母夏の心法なり」次「誠」ともまた
 通す「アハテ」知仁勇の「無か」とし
 句ナシ

一の心法を知らずる
 或生而知之或學而知之或因而知之及其知之
 也或安而行之或利而行之或勉強而行之及
 其成功一也

生ありて知安しし徳の専人も學て知利して
 徳の大賢人も困りて知はれりて徳の哲人も是も
 多きを成りて徳の吾人といふと生知安利の
 己良知も徳の哲人の生利も知れば是徳
 哲人といふも教はれりて知はれりて徳の
 是の有るは徳又知利のありては徳の
 徳らりて徳のありて徳のありて徳のあり

後天に在りては其所を立ててその教の成りたる
 其の五を其ののりとして仁知勇れ徳よふれ
 其の三れもは下古今共は徳のの徳之故に
 徳と云ふは知仁勇あり時と云ふは徳の一也
 其の徳は其の徳よふれ徳徳よけり徳よふ
 心法を不知られは分ふ所ありて仁勇を起す
 愛ありて知勇なきは剛強ありて仁知なきは
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ
 叶して徳よふれ徳よふれ徳よふれ徳よふれ
 こゝろありて仁勇の徳と云ふは徳よふれ徳よ
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ

一の心法を不知られは分ふ所ありて仁勇を起す
 愛ありて知勇なきは剛強ありて仁知なきは
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ
 叶して徳よふれ徳よふれ徳よふれ徳よふれ
 こゝろありて仁勇の徳と云ふは徳よふれ徳よ
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ

或生而知之或學而知之或困而知之及其知之
 一也或安而行之或利而行之或勉強而行之及
 其成功一也

生ありて知安しして徳は聖人也學て知利して
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ
 多分を分りては吾人といふは生知安利の
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ
 其の徳三ともは徳徳よ備ふれ徳よふれ徳よ

而あはれどびく聖人としつゝと孝を知りて周より礼
 を老子より同知の樂を孝びらるるが如く教
 大舜の樂を因て三月肉の味を忘れてゐるを
 孝といひて利してゆく事よまをいふは孝
 を俟て知りて也又聖人としつゝと困知勉行を
 し幼らくて施し衆をよくらふは堯舜とこれ
 をやけりて形あり者ハ親の及ことあはれ也
 洪水より下よゆへ一時ハ禹あり八年三度其
 門をさして入浴せずとて聖人のよれ困知勉行
 せり生知安の仁也孝知利の義と困知勉行は
 勇と孝とくはく徳成就するよ及しては孝と
 其樂一也武同知仁勇ハ一徳也と云ふはこれ

ハ行を云ふとつゞくはつゞさどら所行つゝゆりよ賓

子曰好學近乎知力行近乎仁知恥近乎勇

實はよ孝とを好むはまごひとて孝と人非とをいひて
 目くいの身進むをふ知よと目くふ若とをい
 てやまざらむを力約と云善積て入徳乃功と云ら
 仁ハ金徳の名と故よ仁よ近し柔弱の名も恥の
 心感するぬハ人よゆへハおこりて一念とをい
 るやうのよ行つ一文不通の人下愚を恥し
 りて大よ志をけむやうそよくまじりて
 二道の士と成らりあり人よ存するは恥を
 こらるは恥ハ故よ勇小近

知斯三者則知所以脩身知所以脩身則知所以治人知所以治人則知所以治天下國家矣

好學力勉知恥乃三のちんを知ら吾身を脩るを
知て吾と人と同ん同徳あるは吾身を脩るを
感化し且徳あり人のつみとばりくきくおれ
人を治むし一は玉天下の人れ多之故一天下
おれ治むし一徳乃流約することハ徳ありて
さうらりたりとさうらり也とさうらり感化を
知て天下の人同心同徳の故一善は感一
一徳は善一善は一人感ぜざるをのり

中庸小解下

凡為天下國家有九經曰脩身也尊賢也親親也敬大臣也體羣臣也子庶民也來百土也柔遠人也懷諸侯也

經ハ常也天下古今易つる道也故一九經と云
九經乃存ハ天子諸侯也方より故一修身を始
と以修身の師ハ賢也昔の明君ハ賢を有あはば
とせざりしとさ教一徳ありし一ハ賢を
さふし同し一君真實に道を思ひほふ心
夫必賢師を有る人ありし易ハ六畫五を
一して上九上六を師乃位一筆乃十三絃二を
宮と一と一と上よ置る師の象也

乃自然なり君乃と上位をまゝに承りて師を以てらる
るはよらるるに故は長久なるを親くはる
し親を親しむ也是を孝に曰ふ也わ親先徳の
愛する所を愛する也是を其の事と其の
ぬるよ親類として位祿をあるまじく後悔あり
所し亡子もたてし人なりぬるよ金銀衣服等
所なり一身の樂を以てして可也敬大臣徳を
重く徳臣の上よ置いて礼儀をやくし親之大臣
を賢人としては臣の礼よりまじく敬するし
凡そありして敬するは必ずしも害ありは
大臣し亡子なりは賞罰威刑の權を以て
ら凡そありして敬する也むとわ父母を以て命よ

はよりよありし五倫も亦同一體羣臣の徳は
を君のよ是はよく思ふ子庶民の農工商乃庶
民の上乃是惠をもちと乃てを以て是を
以て保つては徳ありはよく思ふを樂
君子の民の父母がわとてわ來百工の農具兵具
と生る民の日用よ奉りてを以ては職人を
稱す其所よと出するやしは人の君を以て生
し國祿を費つては始は味しは
まらやしよもあらは秀考れはよく思ふを
丹ふらわ渡りたり秀考るを知らりてよく禁
しててよくしはよく思ふは國の費也今
賢者出はらては禁するは成るべき勢也

諸侯則天下畏之

道吾身よりの事にして天下の本を治るは人の民の
 後則とてり也賢を賢くして其教する所の民は
 る所のの事なき事下の人民とてり也
 るごとくす上異端を好むたは徳に
 下の人によりて造化をある者之徳文法
 侯天子とてり也伯父叔父庶兄とてり也昆
 弟の中にも甥いとてり也
 名長下りりよの親を忘れぬは
 ぬく思ふの事ありて大士庶人
 まる感化して親を親とてり也
 下の徳文昆弟とてり也大臣は必家と共なり

大臣は國家と……まどふをなしハ左ノ
 如クアリ

大臣を賢とし敬せしむるときは大臣も恥て
 私なし小臣の讒しへたつる事なし故に眩
 迷する事なし

いん……い思ふ事なり行
 任とてり也故に其
 相長を賢くし敬す事
 新くして是を……
 して……
 ち……
 相……
 を……
 事……
 感……
 樂其樂……

和齊の年

日

事は易て共よ生むとらるる一とくまへ一日
 用ひのりとのわしごと故よ事れうきとら柄よ諸
 職人を置也来すよ必あよむゆらるるゆめ
 りあはれどもあひよ相来す也故よ其あひ
 出来らむはと旅人商人の往來すよ國所を
 らぬく盜賊の氣遣う有とぬ通して常は利
 らと死の四方帝よゆす也必しと帝去ゆま
 ゆららよはるは利其利よはらうけまかひ
 て心の帝去よゆららむ高の利は自然の勢ゆ
 ら高あむすらるるゆらるる財用の權高
 乃よよとて下下の利をばらすらと死士
 を負えして民困窮すらむと高と人高は法

度と富を多りて帝の工商、却て利すくやら
 らるる天下の政は勢をたしとゆあこの勢は
 高と下空虚すらむと又天下の工商は帝
 土へ多くとゆらるる帝は奢を極て法を
 の例澤をかりんよらりて也ゆ事乃るゆゆ
 らゆゆゆらむと天下の諸侯を子と見ゆゆ
 加丁は天下の中よ外東夷南蛮西戎北狄を
 也

齊明盛服非禮不動所以脩身也去讒遠色賤貨
 而貴德所以勸賢也尊其位重其祿同其好惡所

以勸親親也官盛任使所以勸大臣也忠信重祿
所以勸士也時使薄歛所以勸百姓也且省月試
既稟稱事所以勸百工也送往迎來嘉善而矜不
能所以柔遠人也繼絕世舉廢國治亂持危朝聘
以時厚往而薄來所以懷諸侯也

此段北の略李ニハ

此章の解九經の考に見えたり

トテ解釈ヲ有キナリ 欄外ニ左記ノ増補アリ

官盛ハ其天官ニ當テハ君前トイハレハカラス況ヤ大名ヲヤ
大臣ハ其官職ニ私ナキ処ヲ任使スルニ祿ハ功ニ報ユ故ニ世々
スルニ位ハ賢ヲ尊フ故ニ其官擇ヘシ世柄ヲ授ルトキハ堂
與ラハクナリテ威福下ニ移リ人主孤立シテ助ナシ

此の意は云言の口

明ハ思邪あり
心正しき時
血服ハ礼服ノ外
ニト助也人乃
信也也法武定
通也ハ所ニ
放流せしむ

上の如くして威福をば虚説造言知らずれしと
ありと曰く之を色ハ必しと人々をさうりしあり
好む乃心さるべしと人々を好む四ハ内縁ハ
洪言いひて又好む心ハ小人ハ入
さうして乱根生じふと好むと洪言を信し色
を近らうと好む賢者も朝も立しと好むハ
小人乃あてまはる小人ハ所ハありし
みくみくして洪言らうとよと好むハ故
明君の洪言さうと色をさうりハ賢者も
さうと曾子ハ賢と母の信を好む人三度ハ
ば好むと好む故ハ虚説造言多しと好む
と好むと賂貨ハ人々金銀珠玉好むと好む

中庸ハ解

以勸親親也官盛任使所以勸大臣也忠信重祿
 所以勸士也時使薄歛所以勸百姓也且省月試
 既稟稱事所以勸百工也送往迎來嘉善而矜不
 能所以柔遠人也繼絕世舉廢國治亂持危朝聘
 以時厚往而薄來所以懷諸侯也

齊明盛服非礼不動所以修身也齊明思邪也
 狗中清明也心之正一備身之幸也盛服礼服之外
 心之正一備身之幸也盛服礼服之外
 心之正一備身之幸也盛服礼服之外
 心之正一備身之幸也盛服礼服之外
 心之正一備身之幸也盛服礼服之外
 心之正一備身之幸也盛服礼服之外
 心之正一備身之幸也盛服礼服之外
 心之正一備身之幸也盛服礼服之外

上明者一也威儀者一也虛說造言知者一也
 好者一也心者一也好者一也心者一也
 好者一也心者一也好者一也心者一也
 好者一也心者一也好者一也心者一也
 好者一也心者一也好者一也心者一也
 好者一也心者一也好者一也心者一也
 好者一也心者一也好者一也心者一也
 好者一也心者一也好者一也心者一也
 好者一也心者一也好者一也心者一也

中庸八十一

ことしとてしつをばつては妖也とてその貨は民のわ
 のきくも也民乃のわぬぬくは穀也金銀法は不
 穀を助ふらちる之五穀は法もわらるは金銀をお
 しくして不穀をうりてすのわらるはきくも
 飢饉乃年よ金銀、食とまらぬ兵寇は
 多く用らるは不穀也賤貨してまげらるや
 よしりよははくは穀下よふらくして下下は用
 するふを賤すとら也民の字をわらるは
 せも民のわらるは多きわらるはのわらるは成
 もわらるは魚して、鯽也むらうの粟遣ははく粟、穀
 のよく金銀をわらるはくして下下の用をす
 ぶらるは不穀は牙よすくわらるは成商買り士買り

民困窮するはわらるは是は民の積商はくは
 下も庶人のわらるは下地もわらるはと民をわらるは
 表すわらるは表す有徳を多し貨は法は法は
 とは民の積商はくは積は上よわらるは法は法は
 月れにわらるはわらるは也貴徳はくは徳の人を
 也下下も表すわらるはわらるは昔人積はくは積は
 名は民の積商はくは積は上よわらるは法は法は
 ○尊其位は一向は九人よは信を無らるは
 ともは民の積商はくは積は上よわらるは法は法は
 乃は民の積商はくは積は上よわらるは法は法は
 禮は民の積商はくは積は上よわらるは法は法は
 乃は民の積商はくは積は上よわらるは法は法は

天子の礼樂を習ひ多し〜〜〜〜〜
 乃ちハ悪人〜有庠ハ封〜
 故ハ庠ハ父母之禮の由り
 舞の文死〜〜〜
 故ハ舞ハ父母之禮の由り
 庠ハ封〜
 故ハ庠ハ父母之禮の由り
 舞の文死〜〜〜
 故ハ舞ハ父母之禮の由り
 庠ハ封〜
 故ハ庠ハ父母之禮の由り

〜〜〜乃好悪〜
 勸親ハ親族皆通ジ服〜善〜
 進む也君ハ近き故〜
 官盛任使ハ万事〜
 大匠ハ
 大匠ハ

中庸小解下

戸
うぐふいふまをわたりてさうらふ大はつらひに任使して
小長乃強き入らるめい大長といふよくわく進して
るやうにわく古人之官盛に其を官に當てしむ
といふも不便況や大長を任使に大長は
法官に能く任使してさうらふ大長をさうらひ
しむる功に故もせしむる也位に賢をさうら
しむる官に授けしむる也位に賢をさうら
て威福下しむるも人主孤之して助に○忠信
重禄に減らして礼法正しくさうらふ士を賞
して禄を重くしむる人の頭とすれは信を
成して將ありしむる世ありしむる世ありしむる
くも文武のるる氣をいしむるもわく利を賞

やうらふ忠信の人乃下し付て小事しむる
可也人を司りしむるも下しむるも
しむる○時使薄歛に農乃めをさうらひしむる
貢をさうらひしむるも宋衡陽主義季嘗春月出
有老父被苦而耕左右在之老父曰盤于遊畋古人所戒
今陽和布氣一日不耕民失其時奈何以從禽之樂而
有老農也義季止馬曰賢者也命賜之食辭曰大主不奪農
時則境内之民皆飽大主之食老夫何敢獨受大主之賜乎
義季問其名不告而退じしむる農兵しむる出士民
りり田畠しむるもわくしむるもわくしむるもわく
しむるもわくしむるもわくしむるもわくしむるもわく
各一と所のるるもわくしむるもわくしむるもわくしむるもわく

教代乃忠弟のていび五人七人ほどもあつたといふ
えんをさだむる方けりく下人思ひ付けさむごとくお外
つとねえんてこのあふ重し人農兵を用ひ多うとれ
る廻つたといふものかしく軍役農くわすれ
年貢くろく昔は日本も農兵でうろくあふ大
の十ふ一のの貢ありた農は利のまじり百姓の農業
よすしむるは世農と兵と二河よすありては年
貢多くさすれけりつとすもさげくさつてつとを
くも今ハ何と直しづきく業をさすの統さ
れ教代をゆきてりたよすつては年よふ之りてさ
づく〇日省月試既稟称事既稟ハ今れ技持方りわ
百二の家業をよりくはとありて功あらよふさすの極ふ

技持をまじりさくむむと常れ技持をよはつら
ぎの武ハ六日十日ハ一度武ハ一二月ハ一度其はさ
そとつりもは考へ屋を化つと器物を化と堅固不
堅固は吟味あらけ故ハ百五しにるゆふよ家業を
くすつあらけ〇送往迎來ハ人をまじりてさすつてい
くすつしむるよはりくは天下の旅人けは来自由は
してゑづらひさすきつとすつていむるのふらつてめ
又實ハさすつていむるなるは川よのさすみさく渡
らんとすつらるよ舟をまじりていむるさすくは
くわつたよおとらてうらりさづきく橋をさすめん
をさすつていむるさすつていむるの代ハ
ハ橋のすつらるは浪をさすつていむるさすくはわ

而乃主もも強人れまうるひまおし置て役人を
 つきまうるまうるくくしあわむ代も礼武あり
 て人の行来いもうくくはくくはくくはくくは
 ぶらまうるくくしあわむいしはくくはくくは
 教まうるくくしあわむいしはくくはくくは
 しあわむいしはくくはくくはくくはくくは
 しあわむいしはくくはくくはくくはくくは
 中まうるくくしあわむいしはくくはくくは
 どと宿料とらぐあし今乃凡俗くくしあわむ
 政いあわむいしはくくはくくはくくはくくは
 つて帝とくあわむいしはくくはくくはくくは

ぶらまうるくくしあわむいしはくくはくくは
 教まうるくくしあわむいしはくくはくくは
 しあわむいしはくくはくくはくくはくくは
 しあわむいしはくくはくくはくくはくくは
 中まうるくくしあわむいしはくくはくくは
 どと宿料とらぐあし今乃凡俗くくしあわむ
 政いあわむいしはくくはくくはくくはくくは
 つて帝とくあわむいしはくくはくくはくくは

忘して来り也帝らよと天下に告げし所を
て風俗を治むるに昔は日本も中夏も皆
ゆけり物を治むる也人を治むるに
不政ありしはわが國の絶世舉廢國は子孫あり
成て祭を治り又はわが國を治りて其人を
さすは絶世もわが國の絶世ありて絶世
とて同じを治むるにわが國を治りて其人を
むるを絶世もわが國の絶世ありて絶世
ありて代々の家来りて治りて祭を治りて
ふを廢むるに祭を治りて治りて祭を治り
ふとわが國を治りて祭を治りて祭を治り

家を失ひんとするにわが國を治りて祭を治り
りて治りて祭を治りて祭を治りて祭を治り
事よありて悪人ありて其を治りて祭を治り
て祭を治りて祭を治りて祭を治りて祭を治り
悟を直さるるに改むるに治りて祭を治り
の中よりわが國を治りて祭を治りて祭を治り
りて祭を治りて祭を治りて祭を治りて祭を治り
教へ風俗を治りて祭を治りて祭を治りて祭を治り
ちふ来りて天子よとわが國を治りて祭を治り
聘八年よと一度大吏を使ひて祭を治りて祭を治り
を便とて天子よとわが國を治りて祭を治りて祭を治り
わが國を治りて祭を治りて祭を治りて祭を治り

あつた程来れ活況と一目も幾里と人較定わ
て急くるものありつた凡ゆるものさつらとらて年
ハ何程とてとらとら一日と定較らりまき
まとい海むら也故に道中、うらりうらりつた程
つらつら諸公志げり也時を以てすらぬ目年王
代内西三年十一月と活ととわ小まうてを
まねと京十月三十日とら多ハ居ざらう也む人
おらぬ一徳治の生風也厚程落来活信わ
の土産、うらうらゆふの河小ま子うらぬまも
多し一を代活大なるの土産、うらと活勝乃河
大樹とらぬられ多きとけ生風うら一、高
ら子畿内乃地ハ帝土乃居、うらうら多し

此天下の活況、うらうら受あぐ
何を以てうら事とのけりゆらうらとら
作本の礼用、うらぬの奉ふら、うらぬ
と乃重し、活況、うらうら、帝らに、うら
ざらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、
うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、
上よ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、
うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、
不随して、うらぬ、うらぬ、うらぬ、
毎季、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、
うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、
乃地也、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、

多く費すは不徳の責や、さうは責をさすを
てしむふしりことへは、不徳と云ふ下は、さうと云ふは
しと士氏と云ふは、さうと云ふは、武士百戦をさす也
懐諸侯、は、さうと云ふは、さうと云ふは、さうと云ふは、
懐、さうと云ふは、さうと云ふは、さうと云ふは、
て、さうと云ふは、さうと云ふは、さうと云ふは、
凡為天下國家有九經所以行之者一也

九經ハ教多し、
減一、
凡事豫則立不豫則廢言前定則不跲事前定則
不困行前定則不疚道前定則不窮

豫ハ未発を禁す、
い、
云、
よ、
あ、
ハ、
然、
こ、
を、
る、
豫、

乱不治已形治於昧形故用力少而成功多以見其安不
 忘危也夫病已成而後藥之乱已成而後治之譬猶渴而
 穿井闢而鑄兵不亦晚乎昔扁鵲見齊桓侯曰君在疾在
 腠理不治將深後五日復見云君在疾在血脉不治將深
 又後五日復見云君在疾在腸胃間不治將深而桓侯俱
 不能用再後五日復見扁鵲望顔而退走云疾之居腠理
 也湯熨之所及也在血脉鍼石之所及也在腸胃酒醪之
 所及也其在骨髓雖司命無奈之何矣後五日桓侯疾作
 使人召扁鵲而扁鵲已去桓侯遂死故曰聖人之常以
 去病去病未乱先治之用也故曰災福不侵身
 命可保也今此人大災地夫人禍執事者
 其言也且其隱之乎今此人之禍執事者

魚... 病已... 扁鵲... 治... 亂... 疾... 脈... 骨... 髓... 司... 命... 無... 奈... 之... 何... 矣... 後... 五... 日... 桓... 侯... 疾... 作... 使... 人... 召... 扁... 鵲... 而... 扁... 鵲... 已... 去... 桓... 侯... 遂... 死... 故... 曰... 聖... 人... 之... 常... 以... 去... 病... 去... 病... 未... 乱... 先... 治... 之... 用... 也... 故... 曰... 災... 福... 不... 侵... 身... 命... 可... 保... 也... 今... 此... 人... 大... 災... 地... 夫... 人... 禍... 執... 事... 者... 其... 言... 也... 且... 其... 隱... 之... 乎... 今... 此... 人... 之... 禍... 執... 事... 者...

仍當りてしるしむるに道ありて定むる日新成
徳乃心術なり

在下位不獲乎上民不可得而治矣獲乎上有道
不信乎朋友不獲乎上矣信乎朋友有道不順乎
親不信乎朋友矣順乎親有道友諸身不誠
不順乎親矣誠身有道不明乎善不誠乎身矣

此段ハ序方れ如く平元善の如くありて乃く
誠あり乃心術なりとんる人多く誠乃不立と真
志れなきこと其憂と其同なりとありて善の如く
るまじ誠の至るの至也の如くも見れり而別真志
也下位ハ民間居士乃下位にありて本々わ政あり
けりるがに職は居人も也善の對して下位とて

は君ハ諸官ハ賢ありんこと其欲しむるを賢を
和む上は得るを得ずと已らば徳也君乃命也と
りて其を不知らずして君我を不用と之わあはれ
をわくこと不徳とて治へる民を治むるに職
は居るも治の罪なり実よ是れとて治むる民を
治むる人も朋友は信りて朋友ありて一人と
思ふ也一等の人あり朋友はあはれとて一人と
名れ乃心術なり其を平元善の如く親
孝よ兄弟也兄弟ありて倫文甥とて之れ一
親よ順とて朋友よと信りて之れ一人とて
又一等の人あり親類思ひて之れとて朋友家人
よとて之れありて善なり其を平元善の如く

誠者天之道也誠之者人之道也誠者不勉而中
不思而得從容中道聖人也誠之者擇善而固執
之者也

天道、至誠也故、自然ありて、人心を欲之人は、
心も欲也故、自然は、今とんと欲して、
て、理ありて、思つて、中、
明ありて、聖人も、
答として、
也、
以下、
に、
に、

博學之審問之慎思之明辨之篤行之

博學、
審問、
慎思、
明辨、
篤行、

予わ古人の孝ハ六経之書ハ易詩書ハの審同
行てゆさざりたるハ工夫受用して通せざるハ
心よりさうさうしけりやをせん覺えよ由行同孝ハ
お後備するハ工夫受用也して口よりさうさう書
面をみく同くどく同くも審同はらるる人の
心も感でさうさう誠の答とさう見ざるや
慎み誠を思也道德を誨めし経傳を熟讀する
ハ明辨の要なり古人の朋友と交をあら書
えまといくと傲むのやより分をさうさうに
さうさう衆を肩て友なり人と交するハ妻
又嫁りしうんぬんをさう一人知て人知るハ
学ハ一途をさうさうて人よさうさうさう

欲せざり徳をさうさうさうさう
有弗學學之弗能弗措也
有弗問問之弗知弗措也
有弗思思之弗得弗措也
有弗辨辨之弗明弗措也
有弗行行之弗篤弗措也
人一能之己百之人
十能之己千之

けんをさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
つと君子多きさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
君子道ハ重しん事三つ其他のさう有司
すとい君子といわ不孝ハ多し不孝ハ多し
これさうさうて用のさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
い思て自れさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

人欲を去る習を去除き氣質を正しく修めたりて曲
 中乃誠を以て中庸の直を實内し積んで徳を去る所
 乃其形の形色乃形より成るは實徳成就する所
 ありし中より成るは形に必らず形は誠の力に
 わりつるを去るは身より成るは必らず著るは誠の
 相よりつるは故に形別著るとして誠著る
 して内外洞徹は清明身より成る故に著則明と
 して明ありしは衆を御するあり故明則動
 とするは御して衆を御して俗を易故に動則
 衆と之を愛するは其の汗を革して清く暴
 を革して良くと化して故に迹なき形著明
 の虚見よりして誠明相下しは感動を復た

是曲中此誠の象乃上中より立グド〜ちんは是
 初よりつるありし曲はいつくありしとすよつて
 やゆらけく終り四海を去るは形著明を化し
 して愛化より成るは聖人大學の人は人上より立
 天下の風俗を愛化し人心誠なり成るは又曲の
 是物の勾萌して聖人の舒を去ると玉を
 去るは是より成るは人より成るは徳なり
 誠なりとて道を行ふ徳を去るとすは
 乃んがすして石中より成るは乃勾萌
 して是ののびがわし又世乃多難ありて
 泰らざるを去るとして人より成るは
 是の徳を去るとして人より成るは

質の偏はたけりて流に入ると入るとは
 質を欲しし如く留るるは欲し二乃に胸中より
 我てやうくは多難ありて又曲の蒙りて蒙
 り昏昧よりして純一にして蒙りて蒙
 り也といふは下の泉の蒙也其年終りて
 流し水の源也君子は流るるを果し其
 流を善く水ありてやうく流るる海に達す故に果し
 と云ふ止てうくまよふまよふは雲土とて由は
 一山澤氣を通りて流るるく可物を善く
 あり育するも純一未発の蒙自ら養之と凡は
 子聖人の一果行育徳の功を以て脈也曲を致し
 て滅あり形著明動変化よりて者なり

至誠之道可以前知國家將興必有禎祥國家將
 亡必有妖孽見乎蓍龜動乎四體禍福將至善必
 先知之不善必先知之故至誠如神

日月星辰の多雲霧氣れ象との常より何れも
 を示すく久乃至誠なりなり小希知あり積善
 の故慶よりりて國家のおうんとする地なり

凶事ニ字ヲ抹消シ天災地孽物怪人
 妖等ノ凶兆ノ十二字ヲ傍書シアリ者也
 下ニ古人云災異之見所以示吉凶明君親之
 而懼乃能致福聞主親之慢所以致禍世字
 神ニアリ

善悪人カ子不及し何れもめどをとりて天
 子うり也久乃至誠なりなり小希知あり積善
 乃故慶よりりて國家のおうんとする地なり

質の偏はむけむりて流し入るゝ入るゝ人の
 を欲しし如し富貴の欲しし乃ち胸中より
 戦てやうくはむ多難ありて又曲の蒙りて蒙
 り昏昧もあらず純一にしていつくも発せざるに
 養也といふ山下の清泉の蒙也其年終うて
 清く水乃源也君子の修もはての果し其
 流を善く水乃流てやうく流は海に達す故に果し
 と云ふ止てうくもなまきよきに雲は出くも故に
 一山澤氣を通して流りゆくも物を善く
 あり育すも純一未発の蒙貞以養之と凡の
 子聖人の果行育徳乃功を以脉也曲を致し
 て滅あり形著明動變化よりなる者なり

至誠之道可以前知 國家將興必有禎祥 國家將
 亡必有妖孽 見乎蓍龜 動乎四體 禍福將至 善必
 先知之 不善必先知之 故至誠如神

日月星辰の象雲霧動れ象との常より何らるる古
 めを示すく久ら至誠なりなり象たる積善
 の餘慶よりなりて國家のおとんとん地たる
 瑞なり積悪の餘殃なりて象象の象とて何れ
 事ありて象たる至誠の中より何れ者も著
 いれど龜ト也なり何れ今ハ終るは是非
 善悪人カよ不及して何れをとりて天
 子より也なり何れ何れ何れ何れ何れ何れ
 うりたりきなり象たる何れ何れ何れ何れ何れ

吾も其人の言ふに子貢の邦に隠
ると魯に定公といれ礼をなさんて二君皆死之の

又人氏...みゆる之...欄外ニ補
ヒアリ

曰果してあらず又人氏之言勿
の言ふにゆるく禍福はあらずと

言ふ其の先きよくては誠乃感念を
妙を好む神をぬて人よ奇特と思ふに
ゆんよするに非ず又心ゆくも其象也合と
不可也とて誠乃徳ありあらず乱具と
事れあらずもさるるあはれと神乃あはれ
言ふ言ふありて然らば人の言ふ彼は
発す又人乃誠の中よ発す言ふと
言ふ乃氣感して自然に声よ発す彼初と

よりて其の同蜀山人董五經といふは
二十年前よりしてよくあはれとて董五經の
其の程子其の名乃字よりして程子
まゝんと思ひて程子の年を菴園と
一由路より老人よ言ふわ老人と君と程子
よりて言ふや今日来るといふ知て茶菓子
をゆと之の程子其の誠を信じてと
よりて言ふと人よ言ふと人よあはれ
久しと物と不接がなりと心持
昔より神氣を養はれてあはれと
あはれと神氣を養はれてあはれと

山崎

言

吾も其人の言ぬいふゆかりに子貢の邦に隠
ると魯に定公といれ礼容に及んて二君皆死亡の
言ありうといふ果してあらず又人民の言初
くして必らず下の言ありといゆりて禍福ありと
言ふ其つよ先ちうくこと、或は感乃感其つよ子
也を好む林也をぬて人よ奇特と思ひしんぬ
ゆんよすらに非す又心ありてふふ象也合とらとと
不可也やとて或は徳ありあらず治乱具こし
事れあらずとささるあよあしと林のあし武回鳥
鳴よ言あありぐと知つあゆと人の言あ彼よ
発す又えんる或は感の中よ飛鳴しんるとはま
言あ乃氣感して自然に声よ発す彼初こら

よらうす武回蜀山人董五經といふと前知すと
つと賢者そあわらふと蜀山人の念は不起と
十年うらしてうくあ初すとつと董五經の隠者
やの程子其名の字よわけて程子と名づるあ
まあんと思ひして程子くまの草庵といふ人の
しゆ路よ一老人よなまらわ老人と名づる程子
子らよまや今日あんとてあ初て茶菓子と求
しゆといふの程子其誠名を悦ぶこととよま庵
よ程子程子と名づる人よまらうとらまらあは
久しと物と不接があよ心あしとてあ二人
共よ神氣を養はうとあうらあて玉成乃あ初
あうす武回蜀山人の言にきく

武回蜀山人

七

中庸の論
誠者自成也而道自道也誠者物之終始不誠無物是故君子誠之為貴

誠は人物の自然なる生じり然る成統するも其の道は道に實りたるを以て故に自然にして道あり故に誠は人物の始終也とて誠は必ず一物とせらるる一なるも實の一人ありざるを失つての虚生と云ふ一故に君子の貴きものは誠なり

誠者非自成已而已也所以成物也成已仁也成物知也性之徳也合外内之道也故時措之宜也誠乃仁を工夫受用して仁の徳を成すのときなり故に誠人を感して教とのひも

易は下平也万物其の成るを以て仁と云ふなり成己の誠中乃仁也成物の誠中れ初なり同じく性徳の内外を合して一なるなり至誠のなるはいつくしき一なり時措之宜は時中も故至誠無息

易は下平の健なりわとて天乃運一畫なり周天は月月乃代明四時乃錯行なり吉や凶なり徳を成るなりを以て君子の徳を師として自然にやまざるなりこれ得然孔子の不徒不厭是なり高明
不息則久久則徴徴則悠遠悠遠則博厚博厚則高明

父し下ニ「求ることなしといへ」ともトマリテ朱ニ「林涓ニアリ」

六玉滅るるりちるよるし久しきれ
業外よ発す故にちるし一何り悠
ち其勢寛緩也も勢寛緩りして促迫もも
多者ハ必長遠也三代乃治ハ其勢寛緩也
五霸の治ハも勢促迫也故に三代の治ハも
又覇乃治を緩しとての國々の勢をみるも
い何り東ハ地の勢悠緩故にを長りし
てちるし一悠を乃務ハ廣博りして深也
悠を度博りちるのハもりちるも
厚なりちるハ其精めりちるも
博厚所以載物也高明所以覆物也悠久所以成
物也博厚配地高明配天悠久無疆

博厚載物之仁乃德也此任也言明覆物ハ此の徳也
悠久成物ハ勇れ徳也相久し一也よむて成て不壞
不久とまハ成とてとやがれ易し一聖人の天
地と用を同するハ勇の徳也堯舜の王位月
久し一とまハ此の博厚言明悠久ハ其象也
言とてそのま子ハ業を始の統をを成て徳し
じぎも其始の業を統乃博厚言明徳也
言とて子孫悠久りして道大也則大也其言
言わちりしを言て徳也故に悠久なりとて不徳
ハ利也博厚乃徳也故に悠久なりとて不徳
言とて言の初る也言子博厚の仁ハ地道よ
記し高也初ハ天乃子記し悠久ハ勇ハ徳の

古書小序下

世六

やまらざるを乃ハ必滅するなりと云ふも久しき一も
 ハ徳内よ移りて業外よ発す故に去りて何れ
 ち其勢寛緩也と勢寛緩よりして促進する
 子者ハ必長遠なり三代乃治ハ其勢寛緩也
 五覇の治ハ其勢急迫也故に三代の治ハ去り
 又覇乃治を緩しと其の國々の勢をみりし
 此理何れ東ハ地の勢悠緩故に去りて深
 悠を度情なりとのハ去りて深
 厚なりと云ふハ其精めりて去りてと云ふ
博厚所以載物也高明所以覆物也悠久所以成
物也博厚配地高明配天悠久無疆

博厚載物之仁乃徳也此任也高明覆物之知の徳也
 悠久成物の勇れ徳也此久しき也此成て不壞
 不久と云ふ成と云ふ也此易しき聖人の天
 地と用を同する所ハ勇の徳也堯舜の五位目
 久しきと云ふ此の博厚を明悠久れ此の
 仁と云ふ此の仁の業を始の統を成て徳
 じきと云ふ此の始業を統乃博厚なり此の徳よ
 久しきと云ふ此の道大なり則ち其の
 仁と云ふ此の徳の徳也故に悠久なりと云ふ
 年を云ふ此の徳の徳也此の仁の徳也
 此の徳の徳也此の徳の徳也

至疆也配すこれ如仁勇乃徳の二も他人を扱ふ
要道うるを仁の盡性仁の如くも知を
乃至也至息ハ勇れ也

如此者不見而章不動而變無為而成

上一人情を多し明悠久の徳ありて何乃あり
とけりするへなきを仁と人氏とくもいふは
乃章目く小新也何れ物くまうしりりなるを
もくも人氏目く小新なりなりなりなりなり
丁形ありりへまうすなりなりなりなりなり
とくもいふくして工用の成就あり不見あり
章十よふ物ありて多下なりなりなりなりなり
天地之道可一言而盡也其為物不貳則其生物

不測

天地丁く小形なり故よ為物といわ不貳ハ
純一乃徳也則天地乃是と不測ハ至盡蔵ありて
かぢりたりなり

天地之道博也厚也高也明也悠也久也

天地の道博也厚也高也明也悠也久也
天地の如くも小なり人なり小なり各あり
美して天地を配すありとけりりりりりりり
以て天地の如くも小なり人なり小なり各あり
今夫天斯昭昭之多及其無窮也日月星辰繫焉
萬物震焉今夫地一撮土之多及其廣厚載華嶽
而不重振河海而不洩萬物載焉今夫山一卷石

之多及其廣大草木生之禽獸居之寶藏興焉今夫水一勺之多及其不測鼃鼉蛟龍魚鼈生焉貨財殖焉

昭々ハ空明也眼ハ乃空明ト万里ハ空明ト月
一車也夫をけらる明をうごころあくらを稱する
もれと同新うつろふれを稱する一里二里乃る中
よる何乃妙もれ一天れきつなりとまじり及て
日月うつろくゆるふ星辰流約して若く及秋
みりゆこれ津相乃具らると地ハさうとれ一とれ
妙もれとていむごとく一乃相おほひやしうと
きざすともうゆま一聖人の知と常人乃る知と
又あはれお告お惡義よ感一不義をさうくむの

良心ありこと一同一仁義礼知ありて四徳は情
ありらるることおれ一聖人乃性と平人の性
さうかりさよ一同一回れ中と人の文中一回新
ざらがめしとらるれと才知れさるふ大小何ら
と各別やわ平人の知ら一回のうん中れととく
聖人の知ハ人乃る文中れと一故よ聖人よち
神也る剛乃妙ありとらるれと一と聖人乃
聖人さち聖人一神の性ありて不測の妙は
心れ一故よ何ありとらるれ何よありて何ら
とて伏犧ハ文字經書教をさる地國よとれ
りて始て八卦を盡し一天地乃相の理を盡し
心は治乃乃淵源を開き始て神農ハ始て醫

茶券計乃術を伴く義種をうつて新化れ
業を教多し是聖教廣大乃妙也是聖人
よむ者ハハ妙を以て多しわくは陽明子これ
を金よむと云聖人乃知ハ方あれ金乃わく平人
乃知ハ一あれ金のわくは分量各別やわくと云
金の合さるる所ハ多しわくは純色やわ
くはわくは又子あれ金也と云わくはわくは
純一乃金にわくは正合に合さるるは一あれ
合さるるともまがわくはわくは合さるる合さ
て多しわくは平人よむ聖人よむわくは又
わくはわくはわくはわくはわくはわくはわくは
わくはわくはわくはわくはわくはわくはわくは

聖人の事人なる所の真を得しこと
今夫地一世界ありと云々と眼おのれ
多し眼おのれは事とわくは土地のわく
厚よ及てハ大らと載て重いと云ん大河
湖水海をわくはわくはわくはわくはわくは
わくはわくは
今夫山一各山と云々と云々と云々と云々と
石乃多也目前乃石よハ何乃月とみえは深
山のわくはわくはわくはわくはわくはわくは
是れ今浪相決行くは重寶のわくはと蔵
今夫水一河海湖水わくはわくはわくはわくは
今夫水一河海湖水わくはわくはわくはわくは

一、くひのり多し水大ゆれ奇物と
 みるべし泉源をく流す溪澗のくくわす大
 海のくわりのくくわすの魚生くくわすれ
 とくく魚蛟鮫のくくわすくくわす無
 大魚くく風波をくく一舟を通く鮫をく
 里のく不通をく海に山海のくわす塩を焼く
 のくくくく生ずくく作用のくわすくくく
 沢氣をくくくくく川流やまはくくくく
 雨をくくくく妙用神功のくわすくくく
 くくく厚情のくわすくくく一撮一毫
 一勺乃積也鶏鳴を起して善いまくくく
 ざら、入徳の字也曰くくくくくくくく

積善の徳慶家門よ及くくくくくく
 詩云維天之命於穆不已蓋曰天之所以為天也
 於乎不顯文王之徳之純蓋曰文王之所以為文
 也純亦不已

天のくくくく所以のくくく息也天之命の造化
 の流のくくくくくく秋のくくく
 くくくくくくくくくくくくく

徳ノ字ハ特ニ抹消シテ道ニ傍書セリ

一、くくくくくくくくくくくくく
 一、くくくくくくくくくくくくく
 一、くくくくくくくくくくくくく

多一すくいのもの多し水もこれ奇物と
 みえぐす泉源をく流す溪澗のくくくす大
 海のくくくすくすくす及て魚の魚生くこれ
 とくく魚蛟鮫のくくくすくくくす魚
 大魚くく風波をくくくす舟を通く魚を
 里の不通を流し山海のくくくす塩を焼く
 のくくくすと生ずくくくす作用のくくくす
 沢氣をくくくすて川流やまはくくくす
 雨をくくくす妙用神功のくくくす
 くくくす厚情のくくくす雨のくくくす撮一
 一勾の積也鶏鳴を起て善いまてや
 ぐくく入徳の学也日くくくくくくくくく

後て徳をくくくす大くくくす他も能く
 積善れ徳慶家門のくくくす
 詩云維天之命於穆不已蓋曰天之所以為天也
 於乎不顯文王之徳之純蓋曰又主之所以為文
 也純亦不已

天のくくくす所以のくくくす息也天之命の造化
 の流り也君のくくくすて夏のくくくす秋のくくくす
 てくくくすて冬夜のくくくすて昼一息のくくくす
 以れくくくす徳のくくくすくくくす
 を福美とくくくすくくくすくくくす
 多くす故に徳もくくくすくくくす
 徳を也徳のくくくすくくくす

中庸小解下

廿九

ざらし天令の深きうしてけりなきはしり
 比不顯と亦深きをの意こあらはせざらんや
 知くうまきとんやとんみきこむきとんや
 わりてうまきとんやとんみきこむきとんや
 主の徳と声うしてうみくむ穆の意うまき
 ことうまきとんやとんみきこむきとんや
 純一不貳なりぬ純一なりぬとんやとんや
 也故に純一とんやとんみきこむきとんや
 又主の文ありぬとんやとんみきこむきとんや
 大哉聖人之道洋洋乎發育萬物峻極于天優優
 大哉禮儀三百威儀三千
 けんやとんやとんみきこむきとんや

けり洋々と流動充滿してあはれとんやとんや
 のは天地の神なりと別聖人なりぬ也万物を造化
 發育してて主なりぬとんやとんみきこむきとんや
 けり助けざるぬとんやとんみきこむきとんや
 意也礼儀の短礼とて礼の大方なりぬとんやとんや
 礼なりぬ礼乃小なりぬとんやとんみきこむきとんや
 けり吉凶軍實嘉也吉の祭礼也凶の喪礼也軍の軍
 法也賓の客の主人の交接の嘉の冠礼婚礼
 の親儀の礼也三百三千とんやとんみきこむきとんや
 とんやとんやとんやとんやとんやとんやとんや
 事れを条に載て必し口をうまき也は置はれぬとんや
 ことんやとんやとんやとんやとんやとんやとんや

多き成て心安きもむ式より其の事多し家法未だ
多事よ成て人多つるれば財用多費つひらむとて
多とて喪をさし病をさしつひきよは乃れ礼を
多其返礼よは不修の人とつてさしづる礼式よ定ま
はる礼よはさしづる礼也しとゆを却て礼
とすら歎て往來事とばはさしづる人使はるる
しして礼費つひざらるる式くつてさしづる也
烏帽ウボシ子シ也ヒタシ坐シちシのシカシハシをシ友シ乃シ士シれシ禮シをシをシのシ何シ
衣張シ乃シ也シわシのシカシ指シのシ救シとシつシてシ易シ易シ
しして人々の礼儀正しくあり也
待其人而後行故曰苟不至德至道不疑焉
と人々の徳乃人として聖人治世の礼式の書に記

ししてとととととと徳乃人として礼を損益し
て用ざるはむとととととと也世乃興とと
ととと十年ととととととととととととととと
多とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
要道也疑ハ聚也成也礼子とととととととととと
乃ととと成礼ととととととととととととととと
よとととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
よとととととととととととととととととととと
式とととととととととととととととととととと

故君子尊徳性而道問學致廣大而盡精微極高

明而道中庸温故而知新敦厚以崇德

徳を得也人々を修めたるは徳の成る人々を
修むと恭敬奉持して不怠を修むと之を慎
精の受用也書經の顧諟天之明命と之を
是心は乃測深の道同義の經傳を誦明し月
酒を後福し師を孝ひ友を格し遊を去
非改め告を去り進之礼樂行らるる
教本の成るを遊ひ日くは勅し下ら乃を
今ハりき師友下ら修むと之を經賢修を後
て文をを解し師を孝ひ友を格し遊を去
吟詠して古人を師友とすらるるを同義の
とすらるるを文をの成るを修むと之を

ふあどらるるを修むと之を文をの成るを
修むと之を師人ハ常乃師とすらるるを
つと先子孝ひ友を格し遊を去り進之礼
尊徳性道同義の二ハ常を孝ひ友を格し
廣大ハ大なるを修むと之を文をの成る
精微ハ切瑳琢磨の功と用らるるを明ハ
く心の也道中庸ハ人備日用乃中よを
受用乃功と用らるる也温故乃つと之を
やどらるるを修むと之を文をの成るを
礼礼ハ孝ひ友を格し遊を去り進之礼
一故ハ忠信の人礼を孝ひ友を格し遊を
本也責の上九云白賁無咎賁ハ飾也初飾

中庸

三

ありの氣れ故に受ふに利を以てし
よ及ぶに移るは字に記し自修を以て家より
一家を以て下に居るときは必安し礼樂を以て
記し風俗化するに世より記す礼法を以て
可なりとあり記す可なりとあり記す可なり
よんは世にありて礼法を以て氣質乃偏之故に
君子は人より人の文を以てあふりて
し徳の如きは厚く夫廣大の量ありと
必し明乃通なりとありて明廣大なり
らハ精微中庸を以てするなりとありて
乃精微中庸を以てするなりとありて
よりして廣大なり明乃通なりとありて

呂氏云「以下」欄外ニ
神トアリ

微中庸乃通を以てするなりとありて
ハ乃明廣大其中心よりありて
廣大なりと崇礼なりとハ條ハ尊徳性道同なり
糸貝也呂氏云道之在我者徳性而已不先貴乎此
学者不免口耳為人之事而已道之全体者廣
元充乎此則所謂精微者或偏或隘矣道之上
達者高明而已不先止乎此則所謂中庸者同汗合俗矣
是故居上不驕為下不倍國有道其言足以興國無
道其默足以容詩曰既明且哲以保其身其此之
謂與

人乃上よきて下より下より必しゆく心あり
己路各相つらぐ如く倍と各乃各ありて

中庸論

三

ありハ龍ハ格ニ故ニ愛子ニ利ヲ以テスルニ
 一ニ及ぶニ移リテ學ニ起リ自修ニ至ルニ
 ハ家齊リト下ニ居ルニ必キハ礼樂ニ至ル
 地ニ風俗化スルニ世多クハ礼法ニ至ル
 可クハ礼法ニ至ルニ必キハ礼法ニ至ル
 夫ハ礼法ニ至ルニ必キハ礼法ニ至ル
 君子ハ人ニ至ルニ必キハ礼法ニ至ル
 一ニ及ぶニ移リテ學ニ起リ自修ニ至ル
 ハ家齊リト下ニ居ルニ必キハ礼樂ニ至ル
 地ニ風俗化スルニ世多クハ礼法ニ至ル
 可クハ礼法ニ至ルニ必キハ礼法ニ至ル
 夫ハ礼法ニ至ルニ必キハ礼法ニ至ル
 君子ハ人ニ至ルニ必キハ礼法ニ至ル

徹中庸乃禮をとくとせて徳精徹中庸子れ
 一ハ明廣大其中心ハ一ハ條ハ尊徳性道向を
 廣大ハ一ハ宗礼中ハ一ハ條ハ尊徳性道向を
 条目也吕氏云道之在我者徳性而已不先貴乎此
 則所謂問學者不先口耳為人之事而已道之全体者廣
 大而已不先充乎此則所謂精徹者或偏或隘矣道之上
 達者高明而已不先止乎此則所謂中庸者同汗合俗矣
 是故居上不驕為下不倍國有道其言足以興國無
 道其默足以容詩曰既明且哲以保其身其此之
 謂與黙

人乃とよまて強らとんハトよ強て必うゆく心
 己強各相うらぐあて倍と各乃各うらう強
 己強各相うらぐあて倍と各乃各うらう強

いらるごとく知真実を立てて受用成乾乃人上よ居
 して下にならざるを備ふるよ不矯して礼を好むよ
 下よ居て上を思ひて礼を求むよ賞
 を得てはおどろくや明君を知りて是
 らはもて忠を思ひては家事を興起し
 又暗君を代よをりて忠を思ふよ衆人
 之を以て是を以ては衆人を
 賢とんとも知故よ我と人をつれんと家
 事をして急ぐよ詩よ明哲保其身とつて
 ころんて明に居よめく哲は直知ありわ
**子曰愚而好自用賤而好自專生乎今之世及古
 之道如此者裁及其身者也**

此愚の上よ居人よりありて真知く知て位よ
 きてお心れよあるにばうい奔明を知らずして
 賢良を不用しつて我を以て用ふるを好
 ぶ朝として上言を子とわけ賤は下賤は
 居るよ對しては後あるにばうい居るよ
 居あり有ては才あり自滿く或は威勢よ
 て我を以て居るよ賢良を以て論ひ
 るよ今を近世とて平れ法盛る也
 世よ石田とて今乃世よ今乃世よ
 古人の礼を師とて欲よ居るよ
 知るよ我を以て居るよ
 居るよ居るよ居るよ居るよ居るよ

りして自用極して自害するもの、古の徳は
しくの重きこと、武帝の目なれ神をまた
よきしきして、心は、よき月ら、い、う、と、皇統
下で、よき危うら、上ら、ち、子、の、志、居、相、教、し、て
人、傷、乱、建、を、身、れ、子、孫、に、の、法、也、い、ま、の、時、の
二十、節、の、い、し、子、孫、一、門、を、盡、く、を、い、わ、災、害
を、身、も、及、み、れ、也、抑、る、り、と

非天子不議禮不制度不考文今天下車同軌書
同文行同倫

礼、の、言、凶、軍、實、嘉、の、大、法、也、い、し、と、い、ふ、と、い、ふ、時、の、
つ、て、い、し、小、愛、大、愛、あり、故、に、損、益、あり、と、い、ふ、
後、に、損、益、あり、と、い、ふ、度、の、言、乃、制、万、事、の、法、也、と、い、ふ

時、の、言、つ、と、い、ふ、昔、の、言、つ、と、い、ふ、小、月、の、言、つ、と、い、ふ、
乃、玉、冠、の、後、也、乃、人、の、言、つ、と、い、ふ、知、り、と、い、ふ、五十、
二十、五、経、の、言、つ、と、い、ふ、又、十三、経、の、言、つ、と、い、ふ、
カ、の、揚、よ、き、無、く、て、改、め、易、也、文、の、文、法、也、
の、後、よ、き、無、く、て、改、め、易、也、の、つ、と、い、ふ、
人、れ、文、を、く、と、い、ふ、百、の、言、つ、と、い、ふ、
の、つ、と、い、ふ、流、俗、乃、也、の、つ、と、い、ふ、
よ、き、ら、と、い、ふ、考、を、考、て、正、し、く、と、い、ふ、
の、つ、と、い、ふ、明、玉、也、の、つ、と、い、ふ、
し、と、い、ふ、孔子、の、言、つ、と、い、ふ、
よ、き、を、い、ふ、と、い、ふ、損、益、
よ、き、を、い、ふ、と、い、ふ、不、議、不、制、不、考、也、と、い、ふ、

八周の事と事相八百歳... 車に... 乃制をのりて書に文法と事相... 又名を... 乃... 子... 子...

雖有其位苟無其德不敢作禮樂焉雖有其德苟無其位亦不敢作禮樂焉

夫も乃位も... 樂ハ聖人神明乃... 夫も乃位も... 樂ハ聖人神明乃...

ことあ... 古樂... 夫も乃位も... 樂ハ聖人神明乃... 夫も乃位も... 樂ハ聖人神明乃... 夫も乃位も... 樂ハ聖人神明乃...

子曰吾說夏禮杞不足徵也吾學殷禮有宋存焉
吾學周禮今用之吾從周

一杞を夏乃ほつと宋ハ殷れ後也杞よ古礼不傳宋
よハ傳てあり孔子を周乃末にせられつて今も
礼は周乃礼之三代の礼皆老子よ多し多し
傳を以てつと三代の礼を損益して今も叶
をんぬ用はつと一傳をよあよ叶よ多し
よのつとつと今れ礼よつとつと

王天下有三重焉其寡過矣乎

三重ハ礼樂射考文也礼をよつと射をよつと
定らつと射を人情事愛よ絶して人民徳
つとつと射をよつと射をよつと射をよつと

凡易俗乃教之樂ハ樂之修ハ樂一也道行つと
つと故よあつとつと心善よ化つとつと制度ハ方物
事れは則也易簡れ善れつと義とつとつとつと
つとつと不誇不費不飾厚つとつと礼儀をよつと
を本とつと考文ハつと下乃書をえつとつと人民をよつと
つとつと風俗よつと害つとつと禁つとつと也文法をよつと
つとつと考文乃一也つとつとつとつとつとつと
つとつと也或向三重乃中よ樂れつとつとつとつと
一礼樂とのつとつとつとつとつとつとつとつと
礼不の故よつとつと一ハ礼樂をよつとつとつとつと
不議礼ハ不議礼樂也つとつとつとつとつとつと

上焉者雖善無徵無徵不信不信民弗從
雖善不尊不尊不信不信民弗從

上ハ上世也子思ハのりりし上世也夏商れ代乃るる

すくあしノ下ニ左ノ文アリ

或問釋如尊位を去フ人を教し事は何ぞや云入徳の学をしらされは上
位に居て徳の及ぶををしらす言説を以て教るは末又一の事とひあり
しかれ共王位を去といへとも太子なれば人の思ひ入名別之又後生輪廻と
いふ事人の見正なく心もとなき処にて人といさなへり少かしこき者
の後生輪廻の教にしかかはさるを悟道よりみちひき悟道も信せ
ざる者は幻術とて神通奇特をみせてをとりかし入たり其心は人の善
をやめ善をすめんたぬれ共戎國の偏教なればとるにたらず

民を信ぜば人
の從也下ハ下位
の事なりしを信
ぜしは後生輪廻

故君子之道本諸身徵諸庶民考諸三主而不謬

建諸天地而不悖質諸鬼神而無疑百世以俟聖
人而不惑

是乃の後天下よまての事賢者何ぞをさるるは先
成りし徳のついでに人信從するに三王の礼を考
て損益し至善を期して其あるをあるとす
道ありノ下ニ左ノ文アリ
又聖人の言は証拠なし後世聖人出て知へし泰伯のとき是なり
歳の後孔子を待て泰伯の至徳あらはれたり

質諸鬼神而無疑知天也百世以俟聖人而不惑
知人也

鬼神ハ天地乃出也天地鬼神乃著鬼神

中庸小序下

三九

上馬者雖善無徵無徵不信不信民弗從
上焉者雖善無徵無徵不信不信民弗從下焉者

上上世也子思の河上り上世也夏高れ代乃き
周とつてとと盛乃始ハ子思のわり百威のれ
初をよとと且代よとと
初と上をよ且代よとと
初と下は初と信子なり初をよとと
初と下は初と信子なり初をよとと
初と下は初と信子なり初をよとと
初と下は初と信子なり初をよとと
初と下は初と信子なり初をよとと

建諸天地而不悖質諸鬼神而無疑百世以俟聖人而不惑

是より後天下よよとと
是より後天下よよとと
是より後天下よよとと
是より後天下よよとと
是より後天下よよとと
是より後天下よよとと
是より後天下よよとと
是より後天下よよとと
是より後天下よよとと

贊諸鬼神而無疑知天也百世以俟聖人而不惑知人也

中庸小序下

三九

と通ずるは人の心よの川とて人の情を初め

いふるはあちち人の情の流るはあちちの心とて

乃人の心は長短多きく西戎乃人の心は悲喜多きく

辟如天地之無不持載無不覆幬辟如四時之錯

行如日月之代明

聖人の徳の如く天の地乃の如く

さの如く天の地乃の如く

やいふるは天の地乃の如く

きいふるは天の地乃の如く

が如く天の地乃の如く

くわんくわん照すかめく

萬物並育而不相害道並行而不相悖小徳川流

大徳敦化此天地之所以為大也

乃物と化して利一彼を害す

乃物と化して利一彼を害す

乃物と化して利一彼を害す

乃物と化して利一彼を害す

乃物と化して利一彼を害す

乃物と化して利一彼を害す

乃物と化して利一彼を害す

乃物と化して利一彼を害す

乃物と化して利一彼を害す

乃物と化して利一彼を害す

不治治新の如く日月天子よちて下を
一 通す夫学校ハ士大夫君子の如く人民乃情
人君乃知を而くも人君乃知を而くも
人ハ幼くわさく世に学校よ入く士大夫
才と指くの庶人の秀を才と交つての徳に
本 書ハ知を大にすけりて下情
を予行く政令く可よりて人
田獵よとらるる多きを以て下よを
て法を以て用紀綱年くよゆらま
ひくくあをて政令ハ威を以て
三 剛要よとて令つるを以て

化育ハ知れ知れを知れ知れ
夫他人の如くを造化生育乃を以て
君明正の如く仁政を以てを以て
至誠なる人の徳も是れ也
己よ何んぞとて人ハ
賤安危順逆皆一也何んぞとて
か己よ何んぞとて人ハ
肫肫其仁淵淵其淵浩浩其天
肫とと懇至なり、至誠中乃仁也
淵とと深也、淵とと深也、淵とと深也

中庸下

四

所云云ハ知ト書ケルヲ朱書ニテ版本ノ如ク訂正シテ其
次ニ博博淵泉トシテ時に発見するト書ケルヲ朱ニテ持消ス

脱ハハ...徳多クハ欄外ニ補ヒアリ

苟不固聰明聖知達天德者其孰能知之

聰明聖知...
い...の神...
と...
也

詩曰衣錦尚絀惡其文之著也故君子之道闇然而見章小人之道酌然而見亡君子之道淡而不厭簡而文温而理知遠之近知風之自知微之顯可與人德矣

西七ノ九
詩曰衣錦章

錦ハ潔齊乃服也...
白毛...
吾人...
乃服...
丁故...
是則...
と...
真...
と...

中庸下

白雲

中庸下

四十五

Handwritten notes in a grid format at the top right of the page.

ざらあきらまじき浩々と廣大なりしを誠中ひんまわ
んとし一平人としを誠中ふらりしを誠ひんまわの極
やわ朧く仁の象し測く勇の象し浩く知れ
象しを誠ひんまわ

苟不固聰明聖知達天德者其孰能知之

聰明聖知よりして天徳を達し人なるがら
い誠の神はをさけつて朧く測く浩く乃誠あり
しとゆふべし也

詩曰衣錦尚絀惡其文之著也故君子之道闇然
而見章小人之道灼然而見亡君子之道淡而不
厭簡而文溫而理知遠之近知風之自知微之顯
可與人德矣

西七ノ九
詩曰衣錦章

錦ハ潔斎乃服也ツのハ三代史妣とらるとい
白毛ヤのし病家ハ災害のく身ハ患を疾ま
苦人れまてこわららぬえんて三代目命
よ天子より錦を織とを命しつり文明
乃服まてて身よ是たぬまて其身乃神明
す故ハ其身外をうやうすしとたぬとら
ういそそひ乃衣た表よりして錦をうせり
是則身よれ心はこまてめいけりまねとこ
うあよしれどあしつらう同しは好ま
るるれど闇然として無かりてい
真ふれし目ハ小章半と小人のハ解
とららるる一具ハう知やうま

中庸解下

白雲

中庸の徳を以て、
 知遠之近、
 知微之顯、
 知大之小、
 知衆之寡、
 知柔之剛、
 知強之弱、
 知有之無、
 知存之亡、
 知微之顯、
 知大之小、
 知衆之寡、
 知柔之剛、
 知強之弱、
 知有之無、
 知存之亡、
 知微之顯、
 知大之小、
 知衆之寡、
 知柔之剛、
 知強之弱、
 知有之無、
 知存之亡、

朱子版序ノ如ク訂正シアリ
 朱子版序ノ如ク訂正シアリ

乃知^レ中庸^ノ入^レ徳^ノ乃^レ受^レ用^ノ也
 詩云潛雖^レ伏矣亦^レ孔^レ之昭故^レ君子^ノ内省^ノ不^レ疚無^レ惡^ノ
 於^レ志君子^ノ之^レ所^ノ不^レ可^レ及^ノ者其^レ唯^レ人^ノ之^レ所^ノ不^レ見^ノ乎

至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也
 至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也
 至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也
 至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也
 至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也
 至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也
 至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也
 至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也
 至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也
 至誠^レ於^レ前^ノ知^レハ事^ノ之^レ所^ノ由^レ也

くの事初て多志ありし和初夫夫とありし初よ
 一と思ひし一人を思ひし一嬉し一と知りしハ
 ころあしあつ子乃る信きよの水のよき一山樂の音
 乃る一其味さく面白きとをなれし目こに
 用しつよよとらん一是至味至音なれし簡而
 文ハ簡ハ事一すくま知しとをなれし條理ありし
 かんんくのつととよきこれ文あり温而理ハ温初
 まつし其中小よみなれしと後すくく歌
 つつざらし知遠之近ハ必夫天下の路ハ必乃あり
 なることなれし知凡之自ハ必夫天下の凡俗ハ必
 述よりりし知微之顯ハ必夫神明乃知ハ必明ハ
 必んを知しハ必知ハ衣錦より知微顯より

中庸論一 四六

乃能とらざりし入内乃受用せらるる也
 詩云潛雖伏矣亦孔之昭故君子内省不疚無惡
 於志君子之所不可及者其唯人之所不見乎

至誠の事初ハ事れつよとありつれざらとを
 る一初ハ初ハ事れつよとありつれざらとを
 其ハ必し其のつよとありつれざらとを
 くらくしては初ハ事れつよとありつれざらとを
 益る初ハ事れつよとありつれざらとを
 つよとありつれざらとを
 とハ胸中よとありつれざらとを
 さまとありつれざらとを
 君子小人當世ハ相あらびては初ハ事れつよとありつれざらとを

中庸論一 四七

と何れもや小人れをよきものとするか
人の見ざるありをいつてこそは心なげ
たしぬ大難大憂にをて君子小人らるる

詩云相在爾室尚不愧于屋漏故君子不動而敬

「す」ノハ「尚」ハ慎りの意なりト書百ケルヲ朱ニ抹消セリ

至乃西北隅乃上

其地は吾もさむ人れ已ぬものなるは
もみ我身はつらことか明なるはとさわら
よ向へ休息し精神は養ふ乃地はつら
ハ形をぬるんぢりく声臭れきくべた

室ハ奥よりよきわらわ
室暗乃中必神明なれど欺くべし君子

君子の獨居ハ君子室の奥に獨居するト

書百ケルヲ朱ニ抹消セリ

君子は徳をみれば慎

信ありて人なる疑至誠神は感す
信ありて人なる疑至誠神は感す
心乃神明は知らるるは知れぬ故ハ形を

有虞以下ハ細字ニテ

氏而民敬殷人作誓言而民始畔周人作會而

民始疑とす

詩曰奏假無言時靡有爭是故君子不賞而民勸
不怒而民威於鈇鉞

と何れも小人れ其子よなりてくさるるを
人れ見ざるありとつてとよに知らぬ
知れぬ大難大憂にぞして君子小人くさるる

詩云相在爾室尚不愧于屋漏故君子不動而敬
不言而信

爾ハ其子ハ小人ハ屋漏ハ室ハ西北ハ隅ハ上
まらきゆとありて明を通し其下ハくさるる
其地ハ吾も其も人れ己にみざるるをさ
も又其方ハ見らること不明ありと之をさ
よ向て休息して精神を養ふハ地ハ心
ハ形也れみざるく声臭れきくべし深

して知らぬ室ハ奥よゆとくわらわら
幽暗乃中ハ神明を祀ぐて子無子
てれを良知として君子れ其をみれ慎
て屋漏ハ知らぬゆとて實ハ屋漏ハ
心乃神明ハ知らぬゆと故ハ形を
知らぬ敬ありて人あわらざる
信ありて人ハ疑至誠神ハ感す
よを以て知や有虞氏未施信於民而民信夏居民
未施敬於民而民敬殷人作誓言而民始畔周人作會而
民始疑とす
詩曰奏假無言時靡有爭是故君子不賞而民勸
不怒而民威於鈇鉞

奏ハ進也進テ神を祭リ其來格を以テ
鬼神ハ形を以テ見声なきに以テ故に敬ハ誠
何れハ感格以言祭ハ以用テ鬼神を感テ
乃誠以テ人化テ以テ天下争遂乃事
如故ト昔を賞セテ神を以テ人氏トシテ
善ハ以テ以テ樂を惡ハ以テ怒ラシメテ
惡を以テ以テ大將軍ハ鉄鉞を以テ以テ
威以テ神武乃以テ

詩曰不顯惟德百辟其刑之是故君子篤恭而天
下平

不顯惟德ハ衣錦尚絀ハ象ノ叶アリ厚キ如玉
以テ百辟ハ天下ハ徳度ニ至ル子敦厚ハ誠

乃以テ感以テ其乃を以テ以テ天子
威德至善乃以テ以テ天子也
以テ治乃を以テ以テ黃帝堯舜衣
裳ハ以テ以テ天子治乃を以テ
詩云予懷明德不大聲以色子曰聲色之於以化
民末也詩曰德輔如毛毛猶有倫上天之載無聲
無臭至矣

礼式法制の類之ハ号令の下知法度之ト書ケルヲ
朱ニ抹消シ版本ノ如ク訂正シテ
政刑ハ言語ト書ケルヲ朱ニ抹消シ訂正シテ

孔子此詩を解リ又
乃化マんとテ以テ以テ
乃本ハ善ハ以テ以テ
其本乃以テ以テ後令式法度也
以徳乃以テ以テ毛乃以テ以テ

奏ハ進也進テ神を祭リ其才格を以テ
鬼神ハ形を以テ見声なきに以テ故ニ敬ハ誠
何カニ感格以言祭ハ用テ鬼神を感テ
乃誠以テ人化テ下平遂乃事
如故ニ善を賞セテ人民以テ
善以テ下平樂を惡ハ怒ラズ以テ
惡を以テ下平大將軍ハ鉄鉞を以テ
威以テ神武乃述テ

詩曰不顯惟德百辟其刑之是故君子篤恭而天下平

不顯惟德ハ衣錦尚絀の象ニ叶テ厚き玉
以テ百辟ハ天下に徳を以テ天子敦厚を以テ

乃述ハ感以テ其乃を以テ天子以テ天子
威徳至善乃玉ハ象恭以テ天子也天子
以テ治乃を以テ舜以テ天子黄帝堯舜衣
裳以テ治乃を以テ天子也

詩云予懷明德不大聲以色子曰聲色之於以化
民末也詩曰德輔如毛毛猶有倫上夫之載無聲
無臭至矣

声ハ礼式法制ハ孔子此詩を解リ又
曰政刑法令ハ民人を治メ化ヤんとすハ其
氣を才一ト以テ凡化乃有ハ其ハ明述
其本乃一ト以テ後令式法度も一ト又詩
に徳乃一ト以テ毛乃一ト以テ微乃一ト

而いふもよけみをも傲少あり一
 ぞわごごくくして矢ハ易く一志れ
 らあぐいけりり影あつて酒れよよ
 う子心くく一文王乃詩よ上天のこ一ハ声とさく
 奥とねしと一り微妙れ至ありて具小内さく
 主久ある起乃酒よ叶つて道徳ハ人をさくさ
 ともとねる一ハ天比をいけりてよくありさる
 下れるまことと一隠微神妙ありて矢やてく持
 らあけいゆり詩人とも一毛をいけてあぐさ
 心平空くとも一和と空と観てハ内ハ空ま
 病ありり形色ハなまき志りけりてまことと一これ
 病ありともさぐいせるとりハえといや一知ハさ

ぐるさねとまよははつえあり唯正声ハ真
 とつらしてつらつ漸文者切えと一りさね
 をつてハ年ぬらさく一経ハ酒ハ真意を
 らむ人れ自證よりえり

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

とくも一筋のひもよちかみもを傲少あり一
覺る字行むわづらひて失ひ易しと云れ
と一毛行ぬくいはり影ありと云れ
うみゆく一文王乃詩よ上天のこゝと云
奥と相しと云り微妙れ至ありて具小内
主久ある起乃述よ叶つる道徳のたを
とよと云る一天比をいれてよくある
下れるまゝと云隠微妙ありて失やて
あけいゆり詩人とい毛をいりてあ
心平空しと云れと空と観ての
病あり形色ハなきと云り病ありと云
病ありと云るいせと云りいせと云る

と云る和と云よはつえあり唯正声と云
と云る和と云る漸文ありと云る
と云る和と云る和と云る和と云る
と云る和と云る和と云る和と云る

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '和' and '文'.

中庸小解の同志はあらまよらりて書すしと
了と自得の解は二十ありて一二あるを
て全篇を註すなりと乃の理を明して行すなり
理解をうらうく通ぜば志をわたりて先意乃
非を記の後哲は是を知らしむるをさして強
て不辭天子の年をくさば後日わらむし
あはれに後世乃同志は譲りて之に經を平ん
りてさうらひのしつれ中庸也始中終意一
費之且中小章早ありといふと志をわけて章
はむらうと知れ文意にわたりて實に其乃
弊あり又後乃君子は待りて

中庸小解の同志はあらまよらりて書すしと

乙未の冬に始業

